

家庭 分野

すぐに使える 移行期からの 指導計画・指導資料

新学習指導要領
に向けて

目次

新旧内容項目一覧	2
1章 新学習指導要領改訂のポイント	
1 改訂の主なポイント	4
2 移行措置の解説と留意事項	13
2章 年間指導計画の作成	
1 年間指導計画作成の考え方	16
2 年間指導計画例①	18
3 年間指導計画例②	20
4 年間指導計画例③	22
3章 移行期からの指導資料	
1 家庭分野のガイダンス	26
2 「和食」の調理	30
3 「蒸す」調理	32
4 和服の文化	34
5 資源や環境に配慮した製作	36
6 安心して安全な住まい方	40
7 計画的な金銭の管理と三者間契約（クレジットカード）	42
8 高齢者との関わり方	44
9 生活の課題と実践	46

本冊子について

- ・ 本冊子は、中学校の学習指導要領は平成 29 年 3 月、学習指導要領解説は平成 29 年 6 月、高等学校の学習指導要領は平成 30 年 2 月時点での告示の内容に基づいています。
- ・ 本冊子の中で例示している教科書の紙面は、中学校は東京書籍中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書家庭 724（平成 27 年検定済）、高等学校は東京書籍高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書家庭総合 307（平成 28 年検定済）より引用または抜粋しています。
- ・ 本冊子の中で例示しているワークシート例は、教育資料データベース 東書 E ネットより、PDF 形式のデータをダウンロードできます。

新旧内容項目一覧

新（平成 29 年告示）

A 家族・家庭生活

- (1) 自分の成長と家族・家庭生活
 - ア 自分の成長と家庭生活との関わり，家族・家庭の基本的な機能，家族や地域の人々との協力・協働
- (2) 幼児の生活と家族
 - ア(ア) 幼児の発達と生活の特徴，家族の役割
 - (イ) 幼児の遊びの意義，幼児との関わり方
 - イ 幼児との関わり方の工夫
- (3) 家族・家庭や地域との関わり
 - ア(ア) 家族の協力と家族関係
 - (イ) 家庭生活と地域との関わり，高齢者との関わり方
 - イ 家庭関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する方法の工夫
- (4) 家族・家庭生活についての課題と実践
 - ア 家族，幼児の生活又は地域の生活についての課題と計画，実践，評価

B 衣食住の生活

- (1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴
 - ア(ア) 食事が果たす役割
 - (イ) 中学生の栄養の特徴，健康によい食習慣
 - イ 健康によい食習慣の工夫
- (2) 中学生に必要な栄養を満たす食事
 - ア(ア) 栄養素の種類と働き，食品の栄養的特質
 - (イ) 中学生の1日に必要な食品の種類と概量，献立作成
 - イ 中学生の1日分の献立の工夫
- (3) 日常食の調理と地域の食文化
 - ア(ア) 用途に応じた食品の選択
 - (イ) 食品や調理用具等の安全・衛生に留意した管理
 - (ウ) 材料に適した加熱調理の仕方，基礎的な日常食の調理
 - (エ) 地域の食文化，地域の食材を用いた和食の調理
 - イ 日常の1食分の調理及び食品の選択や調理の仕方，調理計画の工夫
- (4) 衣服の選択と手入れ
 - ア(ア) 衣服と社会生活との関わり，目的に応じた着用や個性を生かす着用，衣服の選択
 - (イ) 衣服の計画的な活用，衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れ
 - イ 日常着の選択や手入れの工夫
- (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作
 - ア 製作する物に適した材料や縫い方，用具の安全な取扱い
 - イ 生活を豊かにするための資源や環境に配慮した布を用いた物の製作計画及び製作の工夫
- (6) 住居の機能と安全な住まい方
 - ア(ア) 家族の生活と住空間との関わり，住居の基本的な機能
 - (イ) 家族の安全を考えた住空間の整え方
 - イ 家族の安全を考えた住空間の整え方の工夫
- (7) 衣食住の生活についての課題と実践
 - ア 食生活，衣生活，住生活についての課題と計画，実践，評価

C 消費生活・環境

- (1) 金銭の管理と購入
 - ア(ア) 購入方法や支払い方法の特徴，計画的な金銭管理
 - (イ) 売買契約の仕組み，消費者被害，物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理
 - イ 情報を活用した物資・サービスの購入の工夫
- (2) 消費者の権利と責任
 - ア 消費者の基本的な権利と責任，消費生活が環境や社会に及ぼす影響
 - イ 自立した消費者としての消費行動の工夫
- (3) 消費生活・環境についての課題と実践
 - ア 環境に配慮した消費生活についての課題と計画，実践，評価

※枠囲みは選択項目 3学年間で1以上を選択

旧（平成 20 年告示）

A 家庭・家庭と子どもの成長

- (1) 自分の成長と家族
 - ア 自分の成長と家族や家庭生活とのかかわり
- (2) 家庭と家族関係
 - ア 家庭や家族の基本的な機能，家庭生活と地域のかかわり
 - イ これからの自分と家族，家族関係をよりよくする方法
- (3) 幼児の生活と家族
 - ア 幼児の発達と生活の特徴，家族の役割
 - イ 幼児の観察や遊び道具の製作，幼児の遊びの意義
 - ウ 幼児との触れ合い，かかわり方の工夫
 - エ 家族又は幼児の生活についての課題と実践

B 食生活と自立

- (1) 中学生の食生活と栄養
 - ア 食事が果たす役割，健康によい食習慣
 - イ 栄養素の種類と働き，中学生の栄養の特徴
- (2) 日常食の献立と食品の選び方
 - ア 食品の栄養的特質，中学生の1日に必要な食品の種類と概量
 - イ 中学生の1日分の献立
 - ウ 食品の選択
- (3) 日常食の調理と地域の食文化
 - ア 基礎的な日常食の調理，食品や調理用具等の適切な管理
 - イ 地域の食材を生かした調理，地域の食文化
 - ウ 食生活についての課題と実践

C 衣生活・住生活と自立

- (1) 衣服の選択と手入れ
 - ア 衣服と社会生活とのかかわり，目的に応じた着用や個性を生かす着用の工夫
 - イ 衣服の計画的な活用や選択
 - ウ 衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れ
- (2) 住居の機能と住まい方
 - ア 住居の基本的な機能
 - イ 安全な室内環境の整え方，快適な住まい方の工夫
- (3) 衣生活，住生活などの生活の工夫
 - ア 布を用いた物の製作，生活を豊かにするための工夫
 - イ 衣生活又は住生活についての課題と実践

D 身近な消費生活と環境

- (1) 家庭生活と消費
 - ア 消費者の基本的な権利と責任
 - イ 販売方法の特徴，物資・サービスの選択，購入及び活用
- (2) 家庭生活と環境
 - ア 環境に配慮した消費生活の工夫と実践

※枠囲みは選択事項 3学年間で1又は2事項を選択

1 章

新学習指導要領 改訂のポイント

- 1 改訂の主なポイント
- 2 移行措置の解説と留意事項



改訂の主なポイント

1 改訂の大きなポイント

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃、日本社会はどのようなになっているでしょう。現在、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しています。これから更に将来の予測が困難な時代となると考えられています。そうした中で、学校教育には、子どもたちがさまざまな変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、さまざまな情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められています。

こうしたことを踏まえ、全教科に関わる学習指導要領総則の改訂の大きなポイントが、主に以下①～③の3つにまとめられます。

①資質・能力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」

- ・ 資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に再整理し、それらがバランスよく育まれるよう改善した。
- ・ 言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を教科等横断的な視点に基づき育成されるよう改善した。
- ・ 資質・能力の育成を目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進されるよう改善した。
- ・ 言語活動や体験活動、ICT等を活用した学習活動等を充実するよう改善した。

②カリキュラム・マネジメントの充実

- ・ カリキュラム・マネジメントの実践により、校内研修の充実等が図られるよう、章立てを改善した。
- ・ 生徒の実態等を踏まえて教育の内容や時間を配分し、授業改善や必要な人的・物的資源の確保などの創意工夫を行い、組織的・計画的な教育の質的向上を図るカリキュラム・マネジメントを推進するよう改善した。

③生徒の発達の支援、家庭や地域との連携・協働

- ・ 生徒一人一人の発達を支える視点から、学級経営や生

徒指導、キャリア教育の充実について示した。

- ・ 障害のある生徒や海外から帰国した生徒、日本語の習得に困難のある生徒、不登校の生徒、学齢を超過した者など、特別な配慮を必要とする生徒への指導と教育課程の関係について示した。
- ・ 教育課程外の学校教育活動である部活動について、教育課程との関連が図られるようにするとともに、持続可能な運営体制が整えられるようにすることを示した。
- ・ 教育課程の実施に当たり、家庭や地域と連携・協働していくことを示した。

2 資質・能力の3つの柱

これまでも示されてきた「生きる力」が、より具体化され、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として、以下の3つの柱に整理されました。

- ア 「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識及び技能」の習得)
- イ 「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成)」
- ウ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養)」

技術・家庭科の家庭分野においても、分野目標(1)が「知識及び技能」を、(2)が「思考力、判断力、表現力等」を、(3)が「学びに向かう力、人間性等」を示しています(⇒p.7「技術・家庭科の目標について」)。

また、内容の各項目は、原則として、アの指導事項が「知識及び技能」を、イの指導事項が「思考力、判断力、表現力等」を示しています。「学びに向かう力、人間性等」は、他の2つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定づける重要な要素とされています。

今回の改訂では、全ての教科等の目標及び内容が、これらの3つの柱で再整理されたことが特徴です。



3 主体的・対話的で深い学び

中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成 29 年 6 月）では、家庭科、技術・家庭科における「主体的・対話的で深い学び」を以下のように説明しています。

○主体的な学び○ 自ら決めて自ら考える

現在及び将来を見据えて、生活や社会の中から問題を見だし課題を設定し、見通しをもって解決に取り組むとともに、学習の過程を振り返って実践を評価・改善して、新たな課題に主体的に取り組む態度を育む学び。

○対話的な学び○ 他者（複数の人、本や論文でもよい）の意見等と比較して考える

他者と対話したり協働したりする中で、自らの考えを明確にしたり、広げ深める学び。

○深い学び○ 主体的・対話的な学びの中で自らの考えを深めていく

生徒が、生活や社会の中から問題を見だして課題を設定し、その解決に向けた解決策の検討、計画、実践、評価・改善といった一連の学習活動の中で、生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせながら課題の解決に向けて自分の考えを構想したり、表現したりして、資質・能力を獲得する学び。

例えば、次のような活動が「主体的・対話的で深い学び」につながります。

/// 資料 /// ジグソー法での例

テーマ「どんな場合でもクーリング・オフで返品できる？」

エキスパート活動：A～Cの中から自分の班の担当する資料を読み、班で助け合ってそれぞれの内容のエキスパートになる。

A：クーリング・オフできる期間

B：クーリング・オフの対象となる商品やサービス

C：クーリング・オフの仕方

ジグソー活動 1：A～Cのエキスパートがそろってジグソー活動の班に移動し、自分のエキスパートを説明する。他のエキスパートの説明を聴いて、考えを深める。

ジグソー活動 2：自分の班に戻り、学んだことを発表し合った後、テーマに対する答えとその理由を班で考えてまとめる。

クロストーク活動：クラス全体で、各班の意見を発表、交換する。他の班の発表内容から学んだことをメモする。

個人でのまとめ：活動後の自分自身の考えをまとめる。



さまざまな学びを通して、最終的には自分の考えに戻り、それを深めていくことが大切ですね。

4 カリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントとは、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと」（学習指導要領総則より）です。カリキュラム・マネジメントの3つの側面は以下のように示されています。

- ・生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てる。
- ・教育課程の実施状況を評価してその改善を図る。
- ・教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図る。

例えば、表1に示すように、地域で防災力を高める必要がある場合、防災教育という学校全体の目的を掲げ、各学年及び各教科においての学びを組織的かつ計画的に行うことが考えられます。



表1 防災教育のカリキュラム・マネジメントの例

時期	教科	内容
1年2月	理科	火山噴火や地震発生メカニズム
2年7月	地理	地形や気候の特徴とそれによって起こり得る災害
9月	家庭	災害に備えた安全な住まい方の工夫
9月	保体	災害に備えた環境整備や災害発生時の安全な行動
12月	理科	気象現象とそれにとまなう自然現象
3年7月	歴史	歴史の中の大震災
7月	公民	国、地域での防災の取り組みや現状
2月	理科	地域調査を通じた自然がもたらす恵みと災害
3月	公民	防災について、社会における課題を見つけ、自分にできることを実践

5 家庭分野の改訂の趣旨について

今回の改訂で、「平成 20 年改訂の学習指導要領の成果と課題を踏まえた家庭科、技術・家庭科の目標の在り方」が見直されました。例えば、「家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々と関わること、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないこと」が課題として挙げられました。また、「家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加えて、グローバル化や少子高齢社会の進展、持続可能な社会の構築等、今後の社会の急激な変化に主体的に対応することが求められる」との指摘もなされました。これらを踏まえ、具体的な改善事項としては、まず、以下のような指導内容の示し方の改善がなされました。

- ①小・中・高等学校の内容の系統性の明確化
- ②空間軸と時間軸という二つの視点からの学校段階に応じた学習対象の明確化
- ③学習過程を踏まえた育成する資質・能力の明確化



詳しくは本冊子 9 ページをご確認ください。

6 家庭分野の改訂の要点について

目標については、本冊子 p.4 にあるように、資質・能力の 3 つの柱により明確にし、全体に関わる目標を柱書として示すととともに、(1) は「知識及び技能」を、(2) は「思考力、判断力、表現力等」を、(3) は「学びに向かう力、人間性等」を示しています。また、(1) から (3) までに示す資質・能力の育成を目指すに当たり、質の高い深い学びを実現するために、技術・家庭科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（見方・考え方）を働かせることを示しています。内容も、項目ごとに、育成する資質・能力を 3 つの柱に沿って示すことが基本となっています。「学びに向かう力、人間性等」については、教科目標及び各分野目標においてまとめて示されています。

内容構成は、小・中学校において、「A 家族・家庭と子どもの成長」、「B 食生活と自立」、「C 衣生活・住生活と自立」、「D 身近な消費生活と環境」の 4 つが「A 家族・家庭生活」、「B 衣食住の生活」、「C 消費生活・環境」の 3 つになりました。これらの内容は、空間軸と時間軸の視点から学校段階別に学習対象が整理され

ました。中学校における空間軸の視点は主に家庭と地域、時間軸の視点は主にこれからの生活を展望した現在の生活です。更に、各項目は、原則として「知識及び技能」の習得に係る指導事項アと、「思考力、判断力、表現力等」の育成に係る指導事項イで構成されました。

履修方法においては、「A 家族・家庭生活」の (1) の内容は、小学校家庭科の学習を踏まえ、家族・家庭の機能について扱うとともに、中学校における学習の見通しを立てさせるためのガイダンスとして、第 1 学年の最初に履修させることとしています。また、家族・家庭の機能と各内容との関連を図るとともに、生活の営みに係る見方・考え方とも関連づけるようになっていきます。

「生活の課題と実践」に係る A の (4)、B の (7) 及び C の (3) については、これらの 3 項目のうち、1 以上を選択して履修させ、他の内容と関連を図り、実践的な活動を家庭や地域などで行うこととしています。

更に、社会の変化への対応として、以下のような内容の充実が図られました。

●家族・家庭生活に関する内容の充実

「A 家族・家庭生活」においては、幼児との触れ合い体験などを一層重視するとともに、高齢者など地域の人々と協働することに関する内容を新設している。

●食育の推進に関する内容の充実

「B 衣食住の生活」の食生活に関する内容を小学校と同様の食事の役割、栄養と献立、調理で構成するとともに、調理の学習においては、小学校での「ゆでる、いためる」に加え、「煮る、焼く、蒸す等」の調理方法を扱い、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得できるようにしている。

●日本の生活文化に関する内容の充実

「B 衣食住の生活」においては、和食、和服など、日本の伝統的な生活についても扱うこととしている。

●自立した消費者の育成に関する内容の充実

「C 消費生活・環境」においては、計画的な金銭管理、消費者被害への対応に関する内容を新設するとともに、他の内容と関連を図り、消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎となる内容の改善を図っている。

小学校、高等学校との関連については、詳しくは本冊子 10 ページをご確認ください。



7 技術・家庭科の目標について

技術・家庭科の目標

生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生活と技術についての基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。
- (2) 生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなど、課題を解決する力を養う。
- (3) よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う。

まず、資質・能力の育成に当たっては、各分野に係る見方・考え方を働かせることが重要であることが示されています。また、これまでと同様に、生活や技術に関する、製作、制作、育成、調理等の実習や、観察・実験、見学、調査・研究などの実践的・体験的な活動を通して資質・能力を育成することが期待されています。更に、各分野の学習に適した学習過程を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを展開することも重要とされています。

技術・家庭科の最終的な目標が、よりよい生活や持続可能な社会の構築の礎となる生活を工夫し創造する資質・能力の育成であり、この資質・能力は(1)から(3)に示す3つの柱で構成されています。

(1)は、生徒が自立して主体的な生活を営むために必要とされる各分野それぞれの基礎的・基本的な知識と、それらに係る技能の習得の重要性を示しています。

(2)は、生活や社会の中から問題を見だし、解決する力を育成することをねらいとしていることを示しています。

(3)は、安心、安全で豊かな生活や、環境保全と利便性が両立した持続可能な社会の構築を目指し、将来にわたって生活を工夫したり創造したりしようとする実践的な態度を養うことをねらいとしていることを示しています。



見方・考え方については、詳しくは本冊子12ページをご確認ください。

8 家庭分野の目標について

家庭分野の目標

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 家族・家庭の機能について理解を深め^①、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活の自立に必要な基礎的な理解を図る^②とともに、それらに係る技能を身に付ける^③ようにする。
- (2) 家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだして課題を設定し^④、解決策を構想し^⑤、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現する^⑥など、これからの生活を展望して課題を解決する^⑦力を養う。
- (3) 自分と家族、家庭生活と地域との関わりを考え^⑧、家族や地域の人々と協働し^⑨、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度^⑩を養う。

まず、家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、「生活の営みに係る見方・考え方」である協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することが目指されています。

そして、理論のみの学習に終わることなく、調理、製作等の実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動を通して学習することが期待されています。

生活を工夫し創造する資質・能力とは、家庭分野の学習で育成を目指す資質・能力（「何ができるようになるか」）であり、生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための自立に必要なものと考えられています。

(1)の目標は、学習内容として主に家庭生活に焦点を当て、家族・家庭、衣食住、消費や環境などに関する内容を取り上げ、生活の自立に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身につけることを示しています。

①「家族・家庭の機能について理解を深め」とは、子どもを育てる機能、心の安らぎを得るなどの精神的な機能、衣食住などの生活を営む機能、収入を得るなどの経済的な機能、生活文化を継承する機能などについて理解を深めることで、これからの生活についても展望できる基礎を培うことが意図されています。また、家族・家庭の基本的な機能については、「A家族・家庭生活」、「B衣食住の生活」、「C消費

生活・環境」の内容と関わっていて、重要であることが理解できるようにすることが大切となります。

②「生活の自立に必要な基礎的な理解を図る」とは、家庭分野で習得する知識が、個別の事実的な知識だけでなく、生徒が学ぶ過程の中で、既存の知識や生活経験と結びつけられ、家庭分野における学習内容の本質を深く理解するための概念として習得され、家庭や地域などにおける様々な場面で活用されることが意図されています。

③「それらに係る技能を身に付ける」についても同様に、個別の技能だけではなく、それらが自分の経験や他の技能と関連づけられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・定着することが意図されています。

今回の改訂では、小・中・高等学校の内容の系統性がより重視されています。そのため、小学校の学習を踏まえ、中学校で指導する「知識及び技能」が、高等学校の学習に発展していくことを意識し、確実に定着できるようにすることが大切です。生活の自立に必要とされる家族・家庭、衣食住、消費や環境などに関する「知識及び技能」は、生活に応用・発展できるもの、生活における工夫・創造につながるものとして、変化の激しい社会において心身ともに健康で豊かに生きるために必要であると考えられています。

(2)の目標は、習得した「知識及び技能」を活用し、「思考力、判断力、表現力等」を育成することにより、課題を解決する力を養うことを明確にしたものです。

④「家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだし課題を設定し」とは、既習の知識及び技能や生活経験を基に家族・家庭や地域における生活を見つめることを通して、問題を見いだし、解決すべき課題を設定する力を育成することについて示したものです。

⑤「解決策を構想し」とは、解決の見通しをもって計画を立てる中で、設定した生活の課題を多角的に捉え、解決方法を検討し、計画、立案する力を育成することについて示したものです。その際、他者からの意見等を踏まえて、計画を評価・改善し、最善の方法を判断・決定できるようにすることが大切です。

⑥「実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現する」とは、調理や製作等の実習や、調査、交流活動等を通して、課題の解決に向けて実践したことを振り返り、考察したことを発表し合い、他者から

の意見を踏まえて改善策を検討するなど、実践活動を評価・改善する力を育成することについて示したものです。その際、考察したことを根拠や理由を明確に示して筋道を立てて説明したり、発表したりすることができるようにすることが大切です。

⑦「これからの生活を展望して課題を解決する」とは、将来にわたって自立した生活を営む見通しをもち、よりよい生活の実現に向けて、身近な生活の課題を自分に関わることと捉え、具体的な実践を通して、課題の解決を目指すことが意図されています。

(3)の目標は、(1)及び(2)で身につけた資質・能力を活用し、自分と家族、家庭生活と地域との関わりを見つめ直し、家族や地域の人々と協働して生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養うことを明確にしたものです。

⑧「自分と家族、家庭生活と地域との関わりを考え」とは、家族の互いの立場や役割が分かり、自分の生活を支える家庭生活が地域との相互の関わりで成り立っていることを理解した上で、自分も家庭生活や地域を支える一員として、生活をよりよくしようと積極的に取り組むことができるようにすることについて示しています。

⑨「家族や地域の人々と協働し」とは、よりよい生活の実現を目指して、家族だけではなく、地域に住むさまざまな人々、例えば異世代の人々、障がいのある人々、言葉や文化の違う人々などとも力を合わせて、主体的に物事に取り組むことを示しています。その際、少子高齢社会の進展に対応し、特に、高齢者との関わり方について理解し、適切に関わることをできるようになることも大切です。

⑩「よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度」とは、家族・家庭生活、衣食住の生活、消費生活・環境に関する家族・家庭や地域におけるさまざまな問題を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、一連の学習過程を通して身に付けた力を、生活をよりよくするために生かし、実践しようとする態度について示したものです。このような実践的な態度は、家庭分野で身につける力であり、この力を家庭、地域から広げ、最終的に社会の中で生かし、社会を生き抜く力としていくことが必要であると考えられています。

9 家庭分野の内容構成について

●内容構成の考え方

今回の改訂における内容構成は、次の3つの考え方に基づいています。

① 小・中・高等学校の内容の系統性の明確化

児童生徒の発達を踏まえ、小・中・高等学校の各内容の接続が見えるように、小・中学校においては、「家族・家庭生活」、「衣食住の生活」、「消費生活・環境」に関する三つの枠組みに内容が整理されています。また、この枠組みは、「生活の営みに係る見方・考え方」も踏まえたものです。

② 空間軸と時間軸の視点からの小・中・高等学校における学習対象の明確化

空間軸の視点では、家庭、地域、社会という空間的な広がりから、時間軸の視点では、これまでの生活、現在の生活、これからの生活、生涯を見通した生活という時間的な広がりから学習対象を捉え、学校段階を踏まえて指導内容を整理しています。

③ 学習過程を踏まえた育成する資質・能力の明確化

生活の中から問題を見だし、課題を設定し、解決方法を検討し、計画、実践、評価・改善するという一連の学習過程を重視し、この過程を踏まえて「知識及び技能」の習得に係る内容や、それらを活用して「思考力、判断力、表現力等」の育成に係る内容について整理しています。

また、今後の社会を担う子どもたちに、グローバル化、少子高齢社会の進展、持続可能な社会の構築等の現代的な諸課題を適切に解決できる能力を育成できるよう指導内容の充実・改善が図られています。

●内容の示し方

上記の考え方を踏まえ、内容の示し方の特色としては、次の点が挙げられています。

① 小・中学校の各内容の系統性の明確化

小・中学校ともに「A家族・家庭生活」、「B衣食住の生活」、「C消費生活・環境」の3つの内容とし、各内容や各項目の指導が系統的に行えるようにしている。

② 空間軸と時間軸の視点からの学習対象の明確化

中学校における空間軸の視点は、主に家庭と地域、時間軸の視点は、主にこれからの生活を展望した現在の生活である（⇒p.11「小学校、中学校、高等学校での関連」）。

③ 各内容の各項目で育成する資質・能力の明確化

各内容の各項目は、アとイの2つの指導事項で構成し、原則として、アは、「知識及び技能」の習得に係る事項、イは、アで習得した知識及び技能を活用して「思考力、判断力、表現力等」を育成することに係る事項としている。また、指導事項ア及びイは、学習過

程を踏まえ、関連を図って取り扱うこととしている。

④ 「生活の課題と実践」の一層の充実

「生活の課題と実践」については、各内容に位置付け、生徒の興味・関心や学校、地域の実態に応じて、「A家族・家庭生活」の(4)、「B衣食住の生活」の(7)及び「C消費生活・環境」の(3)の3項目のうち、1以上を選択して履修させることとしている。その際、他の内容と関連を図り、実践的な活動を家庭や地域などで行うことができるよう配慮することとしている。

⑤ 家族・家庭の機能と「生活の営みに係る見方・考え方」との関連を図った内容の見直し

家族・家庭の基本的な機能については、「A家族・家庭生活」の(1)「自分の成長と家族・家庭生活」に位置付け、家庭分野の各内容と関連を図るとともに、家族・家庭や地域におけるさまざまな問題を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承、持続可能な社会の構築等の視点から捉え、解決に向けて考え、工夫することと関連づけて扱うこととしている。

⑥ 社会の変化に対応した各内容の見直し

「A家族・家庭生活」においては、少子高齢社会の進展に対応して、家族や地域の人々と関わる力の育成を重視し、高齢者など地域の人々と協働することや高齢者との関わり方について理解することなどを扱うこととしている。

「B衣食住の生活」においては、食育を一層推進するために、献立、調理に関する内容を充実するとともに、グローバル化に対応して、和食、和服など日本の生活文化の継承に関わる内容を扱うこととしている。

「C消費生活・環境」においては、持続可能な社会の構築に対応して、計画的な金銭管理、消費者被害への対応について扱うとともに、資源や環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎となる内容を扱うこととしている。



10 小学校、中学校、高等学校での関連

今回の改訂では、小・中・高等学校の内容の系統性の明確化が一層目指されています。そこで、児童・生徒の発達を踏まえ、小・中・高等学校の各内容の接続が見えるように改善されています。小・中学校においては、従前のA、B、C、Dの4つの内容を「A家族・家庭生活」、「B衣食住の生活」、「C消費生活・環境」の3つの同じ名称で示し、各内容及び各項目の指導が系統的に行えるようにしています。また、各内

容の各項目で育成する資質・能力は、小・中ともに同じく、ア「知識及び技能」の習得に係る事項、とイ「知識及び技能」を活用して、「思考力、判断力、表現力等」を育成することに係る事項の2つの指導事項で構成しています。こうした内容の示し方により、小・中の関連を明確に理解することができます。また、上記のA、B、Cのそれぞれの内容の枠組みは、生活の営みに係る見方・考え方を踏まえたもので、学校段階に従って、その内容を発展・深化させています。

小学校	中学校
A 家族・家庭生活	A 家族・家庭生活
(1) 自分の成長と家族・家庭生活 ア 自分の成長の自覚、家庭生活と家族の大切さ、家族との協力 (2) 家庭生活と仕事 ア 家庭の仕事と生活時間 イ 家庭の仕事の計画と工夫 (3) 家族や地域の人々との関わり ア(ア) 家族との触れ合いや団らん (イ) 地域の人々との関わり イ 家族や地域の人々との関わり方の工夫 (4) 家族・家庭生活についての課題と実践 ア 日常生活についての課題と計画、実践、評価	(1) 自分の成長と家族・家庭生活 ア 自分の成長と家庭生活との関わり、家族・家庭の基本的との協力・協働 (2) 幼児の生活と家族 ア(ア) 幼児の発達と生活の特徴、家族の役割 (イ) 幼児の遊びの意義、幼児との関わり方 イ 幼児との関わり方の工夫 (3) 家族・家庭や地域との関わり ア(ア) 家族の協力と家族関係 (イ) 家庭生活と地域との関わり、高齢者との関わり方 イ 家庭関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する (4) 家族・家庭生活についての課題と実践 ア 家族、幼児の生活又は地域の生活についての課題と計画、
B 衣食住の生活	B 衣食住の生活
(1) 食事の役割 ア 食事の役割と食事の大切さ、日常の食事の仕方 イ 楽しく食べるための食事の仕方の工夫 (2) 調理の基礎 ア(ア) 材料の分量や手順、調理計画 (イ) 用具や食器の安全で衛生的な取扱い、加熱用調理器具の安全な取扱い (ウ) 材料に応じた洗いや、調理に適した切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付け (エ) 材料に適したゆで方、いため方 (オ) 伝統的な日常食の米飯及びみそ汁の調理の仕方 イ おいしく食べるための調理計画及び調理の工夫 (3) 栄養を考えた食事 ア(ア) 体に必要な栄養素の種類と働き (イ) 食品の栄養的な特徴と組合せ (ウ) 献立を構成する要素、献立作成の方法 イ 1食分の献立の工夫 (4) 衣服の着用と手入れ ア(ア) 衣服の主な働き、日常着の快適な着方 (イ) 日常着の手入れ、ボタン付け及び洗濯の仕方 イ 日常着の快適な着方や手入れの工夫 (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作 ア(ア) 製作に必要な材料や手順、製作計画 (イ) 手縫いやミシン縫いによる縫い方、用具の安全な取扱い イ 生活を豊かにするための布を用いた物の製作計画及び製作の工夫 (6) 快適な住まい方 ア(ア) 住まいの主な働き、季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方 (イ) 住まいの整理・整頓や清掃の仕方 イ 季節の変化に合わせた住まい方、整理・整頓や清掃の仕方の工夫	(1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴 ア(ア) 食事が果たす役割 (イ) 中学生の栄養の特徴、健康によい食習慣 イ 健康によい食習慣の工夫 (2) 中学生に必要な栄養を満たす食事 ア(ア) 栄養素の種類と働き、食品の栄養的特質 (イ) 中学生の1日に必要な食品の種類と概量、献立作成 イ 中学生の1日分の献立の工夫 (3) 日常食の調理と地域の食文化 ア(ア) 用途に応じた食品の選択 (イ) 食品や調理用具等の安全・衛生に留意した管理 (ウ) 材料に適した加熱調理の仕方、基礎的な日常食の調理 (エ) 地域の食文化、地域の食材を用いた和食の調理 イ 日常の1食分の調理及び食品の選択や調理の仕方、調理 (4) 衣服の選択と手入れ ア(ア) 衣服と社会生活との関わり、目的に応じた着用や個性を (イ) 衣服の計画的な活用、衣服の材料や状態に応じた日常着 イ 日常着の選択や手入れの工夫 (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作 ア 製作する物に適した材料や縫い方、用具の安全な取扱い イ 生活を豊かにするための資源や環境に配慮した布を用 作の工夫 (6) 住居の機能と安全な住まい方 ア(ア) 家族の生活と住空間との関わり、住居の基本的な機能 (イ) 家族の安全を考えた住空間の整え方 イ 家族の安全を考えた住空間の整え方の工夫 (7) 衣食住の生活についての課題と実践 ア 食生活、衣生活、住生活についての課題と計画、実践、
C 消費生活・環境	C 消費生活・環境
(1) 物や金銭の使い方と買物 ア(ア) 買物の仕組みや消費者の役割、物や金銭の大切さ、計画的な使い方 (イ) 身近な物の選び方、買い方、情報の収集・整理 イ 身近な物の選び方、買い方の工夫 (2) 環境に配慮した生活 ア 身近な環境との関わり、物の使い方 イ 環境に配慮した物の使い方の工夫	(1) 金銭の管理と購入 ア(ア) 購入方法や支払い方法の特徴、計画的な金銭管理 (イ) 売買契約の仕組み、消費者被害、物資・サービスの選択に イ 情報を活用した物資・サービスの購入の工夫 (2) 消費者の権利と責任 ア 消費者の基本的な権利と責任、消費生活が環境や社会に イ 自立した消費者としての消費行動の工夫 (3) 消費生活・環境についての課題と実践 ア 環境に配慮した消費生活についての課題と計画、実践、

※枠組みは選択項目 3学年間で1以上を選択

次に、空間軸と時間軸の視点から、小・中・高等学校における学習対象の明確化が図られています。

	空間軸	時間軸
小	主に自己と家庭	主として、これまでの生活や現在の生活
中	主に家庭と地域	これからの生活を展望した現在の生活
高	小・中学校に加えて社会	小・中学校に加えて生涯を見通した生活

以上のように、常に小・中・高等学校における学習の相互の関連を図りながら、身につけたい能力を確実に積み上げていくことが期待されています。

高等学校家庭基礎	
A 人の一生と家族・家庭及び福祉	
な機能, 家族や地域の人々	(1) 生涯の生活設計 (2) 青年期の自立と家族・家庭 (3) 子供の生活と保育 (4) 高齢期の生活と福祉 (5) 共生社会と福祉
方法の工夫 実践, 評価	
B 衣食住の生活の自立と設計	
計画の工夫 生かす着用, 衣服の選択 の手入れ いた物の製作計画及び製	(1) 食生活と健康 (2) 衣生活と健康 (3) 住生活と住環境
評価	
C 持続可能な消費生活・環境	
必要な情報の収集・整理 及ぼす影響 評価	(1) 生活における経済の計画 (2) 消費行動と意思決定 (3) 持続可能なライフスタイルと環境
D ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動	

●小・中・高等学校で新たにすみわけられた内容

上記の小・中・高等学校の関連性の概要を踏まえて、学習内容における具体的なすみわけ例について、小・中学校を中心に述べます。

「A 家族・家庭生活」では、小・中学校とも新しく、「家族や地域の人々との協力（・協働）」という文言が出てきます。この場合、小学校では「協力」の内容に主軸がおかれ、中学校では「協力・協働」のどちらもが求められています。ここにおける「協働」とは、中学生の自分と地域の人々がともに力を合わせて物事に取り組むことを意味しています。従前より一層、中学生に、支える人としての立場を期待しているといえます。

また、小・中学校ともに、地域の人々の中に、幼児や高齢者の存在を従前より強く認識させています。小学校では、これらの人々との協力が大切であることの理解の段階にとどまりますが、中学校では、従来の幼児の学習に加えて、「高齢者」との協働や介護などについて理解し、実践するように導いています。高齢者の内容は、従来は高等学校で人の一生における1つのステージとして詳しく学習されてきました。今回の改訂で、中学校においては、家庭や地域を構成している高齢者との協働や、そのために高齢者の基本的な身体の特徴を理解して、立ち上がりや歩行などの介助などができるように示されています。こうした中学校の導入的学習が高等学校の高齢者の学習に導かれています。

「B 衣食住の生活」では、食生活においては、加熱調理として、小学校では、「ゆでる」、「いためる」、中学校ではこれに加え、「煮る」、「焼く」、「蒸す」などを取り扱うことになっています。また、食文化の視点が従前より一層重視され、小学校では和食の基本として、だしの取り方に重点が置かれ、中学校では、地域の食材や小学校でのだしの学習を応用・発展させて、日常の食事として食べられている和食の調理として、だしと地域または季節の食材を用いた煮物または汁物の適切な調理ができるように求められています。

住生活においては、小学校では、中学校で扱う「住居の基本的な機能」のうち、「風雨、寒暑などの自然から保護する働き」が「住まいの主な働き」として扱われています。また、これまで中学校で扱ってきた「音と生活との関わり」が小学校の内容となっています。そこで、中学校で騒音について扱う際は「A 家族・家庭生活」の「家族・家庭や地域との関わり」と関連させて扱うことが示唆されています。

11 生活の営みに係る見方・考え方

家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することが目指されています。

「生活の営みに係る見方・考え方」に示される視点は、家庭分野で扱う全ての内容に共通し、相互に関わり合うものです。取り上げる内容や題材構成などによって、いずれの視点を重視するのかを適切に定めることが大切になります。例えば、「A 家族・家庭生活」においては、主に「協力・協働」、「B 衣食住の生活」においては、主に「健康・快適・安全」や「生活文化の継承・創造」、更に、「C 消費生活・環境」においては、主に「持続可能な社会の構築」の視点を重視することが考えられます。

見方・考え方の視点を踏まえて各内容を着実に学べば、究極的には、生活のあらゆる事象を総合的にとら

えることができ、確実に自立し、また共に生きる人々や環境を大切に考えることができるオールマイティな人に成長していくことでしょう。自立と共生が確実にできる人間を育むことは、技術・家庭科（家庭分野）、小学校・高等学校家庭科が目指すところそのものです。

下に挙げられた見方・考え方の項目群（図1）は、家庭分野を学ぶ上での指針となります。この指針は、指導者にとっても、学習者にとっても確かな道しるべとなります。指導者にとっては、各内容は、どのような能力育成を目指して指導したらよいか、また具体的な目標は何にしたら適切か等の指針となり、また学習者にとっては、指導者が目的をしっかりと持って指導してくれるので、今、何のために学習しているのかを明確に知ることができます。そして学習後には、何が身についたかを振り返る具体的なチェック項目にもなり得るでしょう。

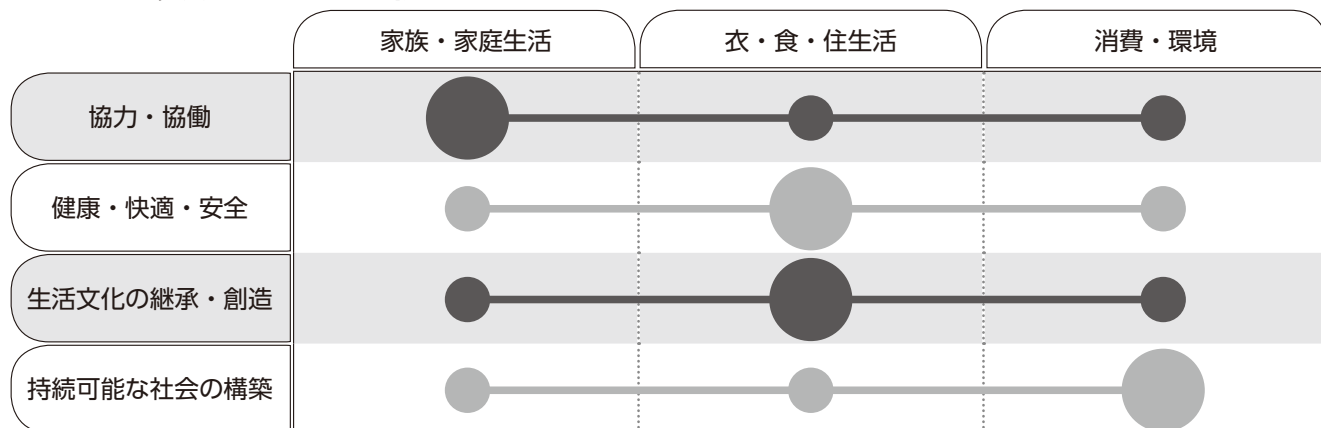
ただし、上記の見方・考え方の項目が望ましい人間形成のすべてを包括できるとは限りません。指導者は、自身の価値判断を踏まえて、これらの項目を精査したり自分なりに活用したりしていきましょう。

表2 小学校、中学校、高等学校の見方・考え方

	見方・考え方
小学校	衣食住に係わる生活事象について、健康・快適・安全等や日本の生活文化への関心の視点から日常生活における解決すべき問題を捉え、衣食住の生活を工夫するために考察すること
中学校	衣食住に係わる生活事象について、健康・快適・安全等や日本の生活文化を継承する視点から家族・家庭や地域における解決すべき問題を捉え、これからの生活を展望して衣食住の生活を営むために考察すること
高等学校	衣食住に係わる生活事象について、健康・快適・安全等や日本の生活文化を継承・創造する視点から家族・家庭や地域社会における解決すべき問題を科学的に捉え、生涯を見通して衣食住の生活を経営するために考察すること

（教育課程部会 家庭、技術・家庭ワーキンググループ（第6回）配布資料より作成）

図1 自立し、共に生きる生活の創造



※主として捉える見方・考え方については、大きい丸で示している。取り上げる内容や題材構成等により、どのような見方・考え方を重視するかは異なる。また、学校段階によって扱うレベルも異なる。

（家庭、技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめより作成）

2

移行措置の解説と留意事項

1 移行のスケジュール

◆改訂スケジュール

中学校の新学習指導要領は、平成 29 年 3 月に告示され、小学校の平成 32 年度全面実施に続き、平成 33 年度(2021 年)から全面実施となります。しかし、円滑な移行を図るために、平成 30 年度から平成 32 年度までは移行期間が設定されており、第 1 学年から第 3 学年までの指導にあたっては、その全部又は一部について新学習指導要領によることができると示されています。



具体的なスケジュールについては、本冊子 14 ページの図 1 をご確認ください。

◆学習指導上の留意事項

目標および内容を 2 学年または 3 学年まとめて示している教科については、平成 32 年度の指導にあたっては翌年度を見通した適切な指導計画を作成して指導し、平成 33 年度の指導にあたっては、前年度における指導内容を踏まえて適切な指導計画を作成して指導する必要があることに十分に留意し、新学習指導要領に円滑に移行できるように留意することが示されています。特に、平成 31 年度の第 1 学年からは、平成 33 年度の第 3 学年の段階で指導内容に漏れなく履修できるよう、3 学年間を見通した指導計画を作成し指導することが重要です。

2 移行期に必要な準備

◆新学習指導要領の理解に向けて

指導にあたっては、新学習指導要領に示されている内容の理解を進め、その趣旨を生かした授業が展開できるよう準備を進める必要があります。今回の新学習指導要領では、目標や内容の示し方が大幅に見直され、これまで「見方・考え方」という言葉を使用してこなかった家庭科にとって大きな変化と言えます。その他、主体的・対話的で深い学び等の考え方などを含め、改訂の趣旨をしっかりと理解しておきたいものです。

◆具体的な準備

具体的な準備は後述する具体的な指導資料で述べていますが、主なこととして、以下のことが考えられます。

●家族・家庭生活に関する内容

少子高齢社会の進展に対応して、家庭生活と地域の関わりの中で高齢者の内容が新設されました。高齢者の介助方法の基礎や地域の高齢者の活躍の状況など、理解を深めたり、資料を収集することが必要です。

●食生活に関する内容

「蒸す」調理が中学校の学習内容に入ったので、蒸し器の準備が必要です。班に 1 つずつなど、必要個数を移行期間に少しずつ準備していきましょう。

●衣生活に関する内容

生活文化の継承に向けて、和服の学習をより一層充実させることが求められています。浴衣の準備など、学校の状況に応じた更なる準備が必要となります。

●住生活に関する内容

伝統的な住様式に関する内容などが重視されます。学校内に和室などの設備がある場合は、その状況確認を行い、学習に生かせるよう準備しましょう。また、家庭内事故について、幼児から高齢者など幅広い年齢の視野に立って考えることが求められています。「家族・家庭生活」の内容と関連させて学習を深めることができるように、資料や疑似体験をするための用具等を準備しておきましょう。

●消費生活・環境に関する内容

新設された金銭管理や消費者被害、消費生活と環境や社会との関係、責任ある消費行動などの学習内容に向けて、生徒の実態把握に努め、中学生にとって身近な消費行動の問題点などを把握しておきましょう。



図 1 学習指導要領改訂スケジュール

	26 年度 (2014)	27 年度 (2015)	28 年度 (2016)	29 年度 (2017)	30 年度 (2018)	31 年度 (2019)	32 年度 (2020)	33 年度 (2021)	34 年度 (2022)
小学校		中教審における検討		周知・徹底	教科書検定	採択・供給	使用開始	32 年度～全面実施	
中学校	中教審諮 11・20	論点整理 8・27	審議まとめ	答申	改訂	教科書検定	採択・供給	使用開始	34 年度～ 年次進行 で実施
高等学校				改訂	周知・徹底	教科書検定	採択・供給	使用開始	

特別支援学校学習指導要領（幼稚部及び小学部・中学部）についても，平成 29 年 4 月 28 日に改訂告示を公示。

特別支援学校学習指導要領（高等部）についても，高等学校学習指導要領と一体的に改訂を進める。

（平成 28 年 8 月 26 日時点の進捗を元にしたイメージより作成）

MEMO

2章

年間指導計画 の作成

- 1 年間指導計画作成の考え方
- 2 年間指導計画例①
- 3 年間指導計画例②
- 4 年間指導計画例③



年間指導計画作成の考え方

1 年間指導計画作成のポイント

教科指導にあたって年間指導計画は、教科の目標達成の道しるべとなる重要なツールです。学習活動の見通しを持つために、年間指導計画には、1年間の時間軸に沿って、どの時期にどのような学習活動をどのくらいの時間をかけるのかを示します。

技術・家庭科（家庭分野）の役割や特徴を生かした計画になるように、各学校で作成する指導の全体計画に示されるテーマや目標、育てたい資質・能力などの教育活動の特質をとらえ、関連を図るようにしましょう。また年間指導計画の作成の際には、生徒の実態を考慮することが大切です。



具体的な生徒の学習の様子や
なって欲しい姿を思い浮かべなが
ら、構想しましょう。

更に家庭分野の学習内容ならではの留意点もあります。例えば、旬や地産地消を意識した食材を用いた調理実習を計画するなら、地域の気候などから食材の流通時期を考慮したり、保育施設などでの体験学習の計画では連携先の希望や行事予定を把握したりして、適切な時期に配置することが必要です。

家庭分野の指導計画作成では、次のような点を考慮する必要があります。

- ・ 3年間を見通した目標設定：学校－教科－学年
- ・ 内容の時間配分や中心となる学習法のバランス
- ・ 題材間の関連
- ・ 他教科などや季節、学校行事、年中行事などとの関連
- ・ 実習室などの使用時期

年間指導計画は、年度当初に立てて終わりではありません。育てたい生徒の姿を学校単位や教科、学年の単位で共有し、目標設定に基づく計画と実践、評価、再計画を動的過程として行っていくために、年間指導計画を活用することが大切です。

2 移行期の指導計画について

平成30年度から平成32年度までの技術・家庭科の指導にあたっては、全部または一部を新学習指導要領の規定によることができるとあります。家庭分野については、大きな内容の変更はありませんので、既存の計画を元にしながら、以下に示すような点に留意して年間指導計画の改善を図るとよいでしょう。

- ①題材など内容や時間のまとまりを見通して、課題解決の過程を重視すること
- ②「生活の課題と実践」と他の内容との関連を図り、家庭や地域などでの実践的な活動を促すこと
- ③各項目の関連を図り、生活を総合的にとらえられるようにすること
- ④小学校や高等学校での学習や、他教科などとの関連を明確にして、系統的・発展的に指導できるようにすること
- ⑤他教科などとの連携を図り、持続可能な開発のための教育を推進すること

指導計画の作成にあたっては、次のような事項への配慮が求められています。

履修方法の改善として、新学習指導要領では、内容の「A 家族・家庭生活」の(1)について、小学校家庭科の学習を踏まえて、家族・家庭の機能を扱うとともに、現行と同様、ガイダンスとして、第1学年の最初に履修させるようになっていきます。また、高等学校との内容の整理も行われており、小学校から高等学校までの教科の系統性を見据えた指導が求められています。

中学校3年間の学習が、卒業後の学習や生活につながっていくと生徒が見通しを持てるような指導計画の工夫をしたいですね。

新学習指導要領の解説には小学校家庭科と中学校家庭分野で育成を目指す資質・能力の系統表や内容の一覧が示されていて参考になります。



3 充実が求められている内容

それぞれ現行学習指導要領でも強調されているところですが、特に新設されたり充実が求められたりしているのは、次のような内容です（★が新設の内容）。

●家族・家庭生活に関する内容

- ・「幼児との触れ合い体験」の一層の重視
- ★「高齢者など地域の人々との協力・協働」の新設

家族・家庭生活については、他者と関わる力の育成のために、幼児との触れ合い体験や、高齢者との関わり方の学習のために、地域の人や施設などと協働して、学校と地域がお互いの資源を活用し合える活動を計画しましょう。

●食育の推進

- ・小学校と同じ構成（食事の役割、栄養と献立、調理）
- ・小学校の「ゆでる、いためる」に加えて、「煮る、焼く、★蒸す」調理を扱う

食育の推進では、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得が求められており、例えば調理法の系統性を意識して小学校での「ゆでる」と中学校での「煮る」や「蒸す」のつながりを捉えやすい内容や配列を工夫した計画を考えてみるのもよいでしょう。

●日本の生活文化に関する内容

- ・和食、和服などの日本の伝統的な生活についての扱い

グローバル化に対応して、日本の生活文化を継承することの大切さに気づくことができるよう、重視されました。日本の生活文化に触れる内容は、総合的な学習の時間などに関連づけて取り扱うのもよいでしょう。

●自立した消費者の育成

- ★計画的な金銭の管理（クレジットカードなどの三者間契約を含む）
- ・消費者被害への対応
- ・消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎とする

自立した消費者の育成のために、消費生活の学習で自分達を取り巻く社会的な課題に関心を持たせた上で、衣食住生活を取り扱って関連を図る構成などが考えられます。

4 つながりのある年間指導計画作成のために

連携、関連を図る、系統性を考える、総合的にとらえるなど、年間指導計画作成のキーワードは「つながり」です。つながりのある年間指導計画を作成するために、まずは、家庭分野の学習で一番大切にしたいテーマを挙げてみましょう。その上で、家庭分野の各学習内容を細切れにみるのではなく、図1に示すような題材配列のパターンのどれを用いれば、よりテーマに沿った学習ができるかを考えるとよいでしょう。

こうしたことは最初、経験の限られた先生方には難しく思えるかもしれません。いくつかの提案の中から、思い描くテーマに近いものを選ぶところから始め、学校や生徒の実態に合わせ、少しずつオリジナルの改善を加えていきましょう。

次ページからテーマに基づく年間指導計画の例を紹介しています。



図1 年間指導計画の題材配列のパターン例

	第1学年							第2学年							第3学年			
	5	10	15	20	25	30	35	5	10	15	20	25	30	35	5	10	15	17.5
分散型	内容①		内容②		内容③		内容①	内容①	内容②		内容③		内容①		内容②		内容③	
集中型	内容①							内容②							内容③			
複合型	内容①	内容②	内容③	内容②	内容③	内容②	内容③	内容③	内容①	内容②	内容①	内容②	内容①	内容②	内容③	内容①	内容②	内容③

（参考：「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」）

2

年間指導計画例①

自立と共生を目指して、家庭から始まって家庭・地域・社会へと
広げる年間指導計画

家庭分野のガイダンスは、家族・家庭の基本的な機能を含めて2時間で扱っています。

「蒸す」調理は、日常食の調理の中でメニューの1つとして取り入れます。



献立調理で組み合わせる副菜として、蒸し野菜を扱います。

和服の文化は、目的に応じた着用や、個性を生かす服装の中で出てきた和服と関連させて扱います。



総合学習などで着装体験を行います。

資源や環境に配慮した製作は、布を用いた物の製作題材として扱っています。

高齢者との関わり方を考える学習は、家族・幼児・地域の内容の最後に位置づけ、高等学校への連携を図っています。

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
第1学年	項目	A(1) 自分の成長と 家族・家庭生活		B(1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴		B(2) 中学生に必要な栄養を満たす食事												
	時数	2		2		9												
	学習内容	ガイダンス*1		・食事の役割 ・健康に良い食習慣		・栄養素の種類と働き ・中学生に必要な栄養素 ・食品に含まれる栄養素 ・6つの食品群 ・食品群別摂取量の目安 ・1日分の献立									・生鮮食品と加工食 ・食品の選択と購入 ・食品の保存と食中 ・日常食の調理(肉、 ・地域の食文化			
第2学年	項目	B(4) 衣服の選択と手入れ							B(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作									
	時数	7							10									
	学習内容	・衣服の働き ・目的に応じた着用 ・個性を生かす服装 ・和服の文化 ・衣服の計画的な活用 ・既製服の選択と購入 ・衣服の手入れ							・生活を豊かにする工夫 ・製作の計画 ・布を用いた物の製作 (資源や環境に配慮した製作) ・よりよい衣生活を目指して									
第3学年	項目	A(2) 幼児の生活と家族				A～C*2 生活の課題と実践			A(2) 幼児の生活と家族					A(3) 家族・家 や地域と 関わり				
	時数	5				3			6.5					3				
	学習内容	・幼い頃の振り返り ・幼児の体の発達 ・幼児の心の発達 ・幼児の生活習慣の習得 ・幼児の生活と遊び				幼児、衣生活、消費・環境の課題と実践 (例) 余り布で幼児のおもちゃを作ろう			・幼児との触れ合い ・子どもにとっての家族					・地域への献 ・高齢者と関わり ・これから私と家族				

活用ヒント

衣食住などの身近で具体的な内容、特に食生活の内容から始めることで、生徒にとって分かりやすく、興味・関心を持って家庭分野の学習に取り組める計画例です。第1学年で食生活を中心に学習するため、食品の購入などにおいて消費・環境と絡めるなどの工夫を取り入れることもできます。第3学年の生活の課題と実践は受験期に重ならないよう、夏休みに行うよう配慮しましょう。



この例は、自分から家族、家族から地域へと段階的に視野を広げ、自分や家族のために進んでよりよい生活を工夫していくことをねらいとしています。第1学年から第2学年では、自分の生活を見つめ直し、生活の自立を目指して、内容Bと内容Cを履修させます。第3学年では、家族や地域のことを考えてよりよい生活を創造することを目指して、内容Aを履修させます。



18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
B(3) 日常食の調理と地域の食文化								B(7)*2 生活の 課題と実践				B(3) 日常食の調理と地域の食文化					
12								4				6					
品 毒の防止 魚、野菜)								食生活の課題 と実践 (例) 日本の食文化を追求 しよう				・地域の食材を生かした調理 ・よりよい食生活を目指して					
B(6) 住居の機能と安全な住まい方								C(1) 金銭の管理と購入				C(2) 消費者の権利と責任		A(1) 自分の成長と家族・ 家庭生活			
7								5				4		2			
・住まいの役割 ・生活行為と住空間 ・日本の住まいと住まい方 ・安全で安心な住まい ・健康で快適な住まい ・よりよい住生活を目指して								・消費者としての自覚 ・販売方法と支払い方法 ・計画的な金銭の管理と クレジットカード ・商品の選択と購入 ・消費者トラブル				・消費者の権利と責任 ・よりよい消費生活を目 指して ・エネルギー消費と環 境 ・持続可能な社会を目 指そう		・中学生と しての自 立 ・家庭生活 と地域と の関わり			

「和食」の調理は、地域の食材を生かした調理で扱っています。

だしと地域の特産品を使って、具たくさんみそ汁を作ります。



安全で安心な住まいは、主体的・対話的で深い学びを実践するために想定時数を2時間にしています。

住まいの安全について家族の視点から考える活動をし、班で意見を交換させます。

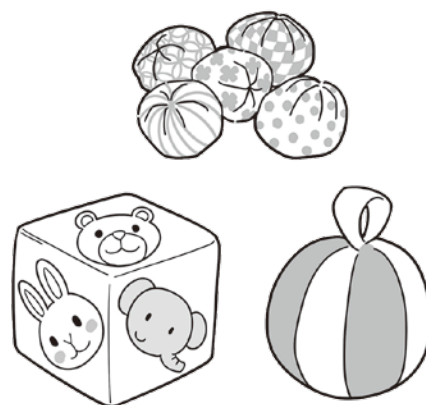


計画的な金銭の管理とクレジットカードについては、販売方法と支払い方法と関連させて扱うようにしています。

庭の
貢
の
の

指導時数	A	B			C	生活の 課題と実践	計
		食	衣	住			
	18.5	29	17	7	9	7	87.5

- * 1 家庭分野のガイダンスでは、自分の成長の振り返り、小学校家庭科の学習内容の振り返り、3学年間の学習内容を見通す内容、家族・家庭の基本的な機能と学習内容とのつながりを指導し、これからの学習への期待と意欲を持たせます。
- * 2 生活の課題と実践は、第1、3学年で扱っています。第3学年では、消費生活・環境、布を用いた物の製作、幼児の複合題材として、余り布を用いた幼児のおもちゃ作りを想定しています。



3

年間指導計画例②

持続可能な社会の構築を目指して生活を工夫し創造する力を身につける年間指導計画

家庭分野のガイダンスは、家族・家庭の基本的な機能を含めて1時間で扱っています。

ガイダンスの後、家庭分野の学習の始まりに、消費者としての自覚や、権利と責任を位置づけています。



よりよい生活のため持続可能な社会をつくる大切さを強調します。

計画的な金銭の管理とクレジットカードについては、販売方法と支払い方法と関連させて扱うようにしています。

和服の文化は、実際の和服に触れて、たたみ方を知ることによって和服の構成について学べるようにしています。



地域の高齢者をゲストティーチャーに迎え、和服の良さについて話を聞き、たたみ方を教えてもらいます。

リフォーム・リメイクの題材を扱ったあとに環境に配慮したよりよい衣生活についての学習につなげます。



着なくなった古着を持ち寄り、小物を製作します。

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
第1学年	項目	A(1)	C(1) 金銭の管理と購入				C(2) 消費者の権利と責任				B(1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴		B(2) 中学生に必要な栄養を					
	時数	1	5				4				2		8					
	学習内容	*1 ガイダンス	・消費者としての自覚 ・販売方法と支払い方法 ・計画的な金銭の管理とクレジットカード ・商品の選択と購入 ・消費者トラブル				・消費者の権利と責任 ・よりよい消費生活を目指して ・エネルギー消費と環境 ・持続可能な社会を目指して				・食事の役割 ・健康に良い食習慣		・栄養素の種類と働き ・中学生に必要な栄養素 ・食品に含まれる栄養素 ・6つの食品群 ・食品群別摂取量の目安 ・1日分の献立					
第2学年	項目	B(4) 衣服の選択と手入れ								B(5)C(2) 生活を豊かにするための布を用いた製作 ／ 資源・環境に配慮した製作								
	時数	8								9								
	学習内容	・衣服の働き ・目的に応じた着用 ・個性を生かす服装 ・和服の文化 ・衣服の計画的な活用 ・既製服の選択と購入 ・衣服の手入れ								・生活を豊かにする工夫 ・製作の計画 ・布を用いた物の製作（資源や環境に配慮した製作） ・よりよい衣生活を目指して								
第3学年	項目							A(2) 幼児の生活と家族						A(1)(3) 家族・家庭生活				
	時数							13.5						4				
	学習内容	・幼い頃の振り返り ・幼児の体の発達 ・幼児の心の発達 ・幼児の生活習慣の習得 ・幼児の生活と遊び ・幼児との触れ合い ・子どもにとっての家族												・家庭や家族の基本的な機能 ・中学生にとっての家族 ・地域への貢献				

活用のヒント

中学生になると、お小遣いなど使えるお金が増えるので、生活のニーズに合っている計画例ではありますが、第1学年の初めに座学が中心となる消費生活・環境の内容は難しく感じられないような準備が必要となります。衣食住の内容などと絡めながら、興味・関心を高め、それぞれの学びを深めることができるようにしましょう。また、第2学年末に設定している生活の課題と実践は、既に地域の内容を学習しているので、地域とのつながりを持たせることができます。



この例は、持続可能な開発のための教育（ESD）の視点を重視し、消費者としての適切な判断や環境への配慮と、衣食住の生活を関連づけて考え、自分なりに生活を工夫・創造できるようになることをねらいとしています。

第1学年から第2学年では、内容Cと内容Bを結びつけ、第3学年で、内容Aを履修させます。



18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
満たす食事			B(3) 日常食の調理と地域の食文化											B(7)C(3)*2 生活の課題と実践			
			11											4			
			<ul style="list-style-type: none"> ・生鮮食品と加工食品 ・食品の選択と購入 ・食品の保存と食中毒の防止 ・日常食の調理（肉、魚、野菜） ・地域の食文化 ・地域の食材を生かした調理 ・よりよい食生活を目指して 											消費・環境、食生活の課題と実践（例） 食品購入から調理後かたづけまでのエコクッキング			
B(6) 住居の機能と安全な住まい方			A(1)(3) 家族・家庭生活と地域との関わり											A(4)B(7)*2 生活の課題と実践			
8			6											4			
<ul style="list-style-type: none"> ・住まいの役割 ・生活行為と住空間 ・日本の住まいと住まい方 ・安全で安心な住まい ・健康で快適な住まい ・よりよい住生活を目指して 			<ul style="list-style-type: none"> ・家族・家庭の基本的な機能 ・中学生としての自立 ・家庭生活と地域との関わり ・高齢者との関わり 											家族、住生活の課題と実践（例） 災害等に備えた住空間の整え方			

「蒸す」調理は、日常食の調理の中でメニューの1つとして取り入れられます。

「和食」の調理は、地域の食材を生かした調理で扱っています。

安全で安心な住まいは、主体的・対話的で深い学びを実践するために想定時数を3時間にしています。

防災の視点から、他教科の学習と関連させることもできます。



高齢者との関わり方を考える学習は、住生活の内容と家族・家庭生活と地域との関わりの内容を関連させて扱っています。

指導時数	A	B			C	課題実践	計
		食	衣	住			
	24.5	21	17	8	9	8	87.5

* 1 家庭分野のガイダンスでは、自分の成長の振り返り、小学校家庭科の学習内容の振り返り、3学年間の学習内容を見通す内容、家族・家庭の基本的な機能と学習内容とのつながりを指導し、これからの学習への期待と意欲を持たせます。

* 2 生活の課題と実践は、ESDを推進する視点から他教科などとの連携を図りやすくするために、第1、2学年の最後に設定しています。第1学年では消費生活・環境と食生活とを関連づけて「エコクッキング」、第2学年では、ESDの防災の視点から、安全な住まい方と地域との関わり、高齢者との関わり、との関連を図って扱っています。総合学習などで地域の防災マップ作りや避難所体験と関連づけます。



4

年間指導計画例③

家族・家庭生活の営みを基盤として豊かな生活を実現させるための年間指導計画

家庭分野のガイダンスと合わせて想定時数を6時間とし、家族・家庭生活の内容に、主体的・対話的な学習を取り入れやすくしています。



家庭の機能のランキングや、家庭での自立度チェックを行います。

和服の文化は、浴衣の着装体験を取り入れて実践的・体験的に学べるようにしています。

計画的な金銭の管理とクレジットカードについては、販売方法と支払い方法と関連させて扱うようにしています。

和食の調理は、地域の食材を生かした調理で扱っています。

第3学年に環境の学習や布を用いた物の製作を位置づけ、環境に配慮した生活や豊かな生活について、全学習を総合的にとらえられるようにしています。

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
第1学年	項目	A(1) 自分の成長と家族・家庭生活		A(1) 自分の成長と家族・家庭生活			B(4) 衣服の選択と手入れ								B(1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴			
	時数	2		4			8								2			
	学習内容	ガイダンス*1		・家庭や家族の基本的な機能 ・中学生としての自立 ・家庭生活と地域との関わり			・衣服の働き ・目的に応じた着用 ・個性を生かす服装 ・和服の文化 ・衣服の計画的な活用 ・既製服の選択と購入 ・衣服の手入れ								・食事の役割 ・健康に良い食習慣			
第2学年	項目	C(1) 金銭の管理と購入					B(3) 日常食の調理と食文化（地域の食文化）							B(6) 住居の機能と安全な				
	時数	5					7							7				
	学習内容	・消費者としての自覚 ・販売方法と支払い方法 ・計画的な金銭の管理とクレジットカード ・商品の選択と購入 ・消費者トラブル					・地域の食文化 ・地域の食材を生かした調理 ・よりよい食生活を目指して							・住まいの役割 ・生活行為と住空間 ・日本の住まいと住まい ・安全で安心な住まい ・健康で快適な住まい ・よりよい住生活を目指				
第3学年	項目	C(2) 消費者の権利と責任				B(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作			B(7)*2 生活の課題と実践		B(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作							
	時数	4				4			2		7.5							
	学習内容	・消費者の権利と責任 ・よりよい消費生活を目指して ・エネルギー消費と環境 ・持続可能な社会を目指す				・生活を豊かにする工夫 ・製作の計画 ・布を用いた物の製作（資源や環境に配慮した製作）			衣生活の課題と実践（例） 衣服を再利用した家庭生活に役立つ物の製作		・生活を豊かにする工夫 ・製作の計画 ・布を用いた物の製作（自分や家族の生活を豊かにする製作） ・よりよい衣生活を目指して							

➤ 活用のヒント

各1年間の中で、さまざまな学習内容が入りますが、長期休みを利用し、各分野の学習内容を家庭生活で実践させるなどすると、有効となる計画例です。第3学年は隔週での授業のため、製作はねらいを明確にし、あまり負担のかからない題材を取り上げる必要があります。また、第3学年での生活の課題と実践は、受験直前とならないよう、授業の進行状況で調整しましょう。実習については、夏場の調理実習は食中毒などに、冬場の幼児との触れ合い体験は感染症などに、十分に配慮しましょう。



この例は、第1学年の最初に「家族・家庭と地域」を学習することで、自分が家族の一員としての役割を果たすという小学校家庭科との関連を持たせ、家庭分野の学習が、家族・家庭生活の営みを基盤として豊かな生活を実現させることをとらえられるようにしています。



18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
B(2) 中学生に必要な栄養を 満たす食事								B(3) 日常食の調理と食文化（食品の選択と調理）									
9								10									
<ul style="list-style-type: none"> ・栄養素の種類と働き ・中学生に必要な栄養素 ・食品に含まれる栄養素 ・6つの食品群 ・食品群別摂取量の目安 ・1日分の献立 								<ul style="list-style-type: none"> ・生鮮食品と加工食品 ・食品の選択と購入 ・食品の保存と食中毒の防止 ・日常食の調理（肉、魚、野菜） 									

「蒸す」調理は、日常食の調理の中でメニューの1つとして取り入れます。

「蒸す」調理は、主菜としてふた肉と野菜の重ね蒸しを作ります。



住まい方	A(2) 幼児の生活と家族	A(4)*2 生活の 課題と実践	A(2) 幼児の生活と家族	A(3) 家族・家庭や 地域との関わり
	5	3	5	3
方 して	<ul style="list-style-type: none"> ・幼い頃の振り返り ・幼児の体の発達 ・幼児の心の発達 ・幼児の生活習慣の習得 ・幼児の生活と遊び 	幼児の生活の 課題と実践 (例) 幼児の安全な 遊びの空間を 考える計画	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児との触れ合い ・子どもにとっての家族 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生にとっての家族 ・地域への貢献 ・高齢者との関わり

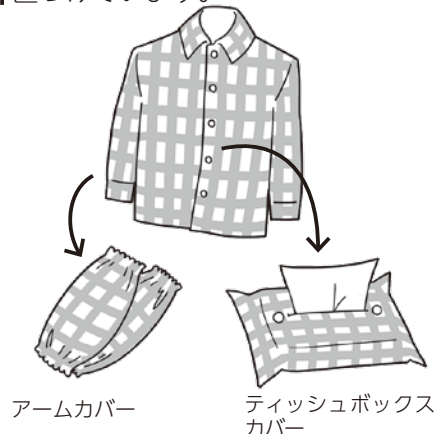
安全で安心な住まいは、主体的・対話的で深い学びを実践するために想定時数を2時間にしています。

小学校での学習となった「音」などの学習の時間をあてます。



高齢者の内容は、家族・幼児の学習の最後に、地域の学習と合わせて地域の高齢者との関わり方を考えられるようにしています。

豊かな生活の基盤として空間をとらえられるよう、「安全で安心な住まい」、「健康で快適な住まい」の学習の後に幼児の生活と遊びの学習を位置づけています。



- * 1 家庭分野のガイダンスでは、自分の成長の振り返り、小学校家庭科の学習内容の振り返り、3学年間の学習内容を見通す内容、家族・家庭の基本的な機能と学習内容とのつながりを指導し、これからの学習への期待と意欲を持たせます。
- * 2 生活の課題と実践は、第2、3学年の長期休暇に位置づけ、問題解決的な学習や主体的・対話的な学習が繰り返し行えるようにしています。第2学年では幼児の安全な遊び空間の計画作り、第3学年では衣服を再利用した製作を扱います。

MEMO

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

3章

移行期からの 指導資料

- 1 家庭分野のガイダンス
- 2 「和食」の調理
- 3 「蒸す」調理
- 4 和服の文化
- 5 資源や環境に配慮した製作
- 6 安心して安全な住まい方
- 7 計画的な金銭の管理と三者間契約
(クレジットカード)
- 8 高齢者との関わり方
- 9 生活の課題と実践



家庭分野のガイダンス

何を押さえればよいのでしょうか？

◆学習指導要領「A 家族・家庭生活」より

(1) 自分の成長と家族・家庭生活

ア 自分の成長と家族や家庭生活との関わりが分かり、家族・家庭の基本的な機能について理解するとともに、家族や地域の人々と協力・協働して家庭生活を営む必要があることに気付くこと。

(内容の取扱いより)

ア (1) のアについては、家族・家庭の基本的な機能がAからCまでの各内容に関わっていることや、家族・家庭や地域における様々な問題について、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承、持続可能な社会の構築等を視点として考え、解決に向けて工夫することが大切であることに気付かせるようにすること。

(指導計画の作成より)

(3) 家庭分野の内容の「A家族・家庭生活」の(1)については、小学校家庭科の学習を踏まえ、中学校における学習の見通しを立てさせるために、第1学年の最初に履修させること。

◆学習指導要領解説より

- ・ (A(1) については、) 家庭分野のガイダンスとしての扱いと、A (2)「幼児の生活と家族」や (3)「家族・家庭や地域との関わり」との関連を図り学習を進める扱いの二つがある。
- ・ ガイダンスとしては、第1学年の最初に履修させ、これまでの家庭生活や小学校家庭科の学習を振り返ったり、家庭分野の学習のねらいや概要に触れたりして中学校3学年間の学習の見通しをもたせるようにする。
- ・ 家庭分野の「A家族・家庭生活」、「B衣食住の生活」、「C消費生活・環境」と関わらせ、家族・家庭の基本的な機能について理解できるようにする。
- ・ 家庭分野の学習への期待と意欲をもつことができるようにする。
- ・ A (2) や (3) との関連を図り学習を進める際には、A (2) 又は (3) の導入として、自分の成長を振り返るとともに、中学生の時期にある自分と家族・家庭生活との関わりについて考え、自分の成長や生活は家族や家庭生活に関わる地域の人々に支えられていることに気付くようにする。
- ・ 家族・家庭の基本的な機能については、「A家族・家庭生活」の(1)「自分の成長と家族・家庭生活」に位置付け、家庭分野の各内容と関連を図るとともに、家族・家庭や地域における様々な問題を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承、持続可能な社会の構築等の視点から捉え、解決に向けて考え、工夫することと関連付けて扱うこととしている。

◇押さえないポイント

これまで、ガイダンスの内容に含まれていなかった家族・家庭の基本的な機能が家族の内容から移動されました。家族・家庭の基本的な機能が果たされることが、よりよい生活を営むためには大切であるというポイントを押さえましょう。A～Cの内容と関わらせて理解できるようにします。

また、家族や地域の人々と協力・協働して生活を営む必要があることに気づくことも新設されました。「協働」とは、中学生の自分と地域の人々がともに力を合わせて主体的に物事に取り組むことを意味しています。支えられる側から支える側の立場で生活を創っていくことが求められます。

家族・家庭生活について学習するときには、架空の家族や物語などを活用して、各家庭や生徒のプライバシーには十分に配慮しましょう。

ガイダンスで押さえる内容が増えましたが、どの程度の授業時数を想定すればよいのでしょうか。



ガイダンス以外のA～Cの内容とも関連を図りながら、1～3時間程度で、学習の目標を達成できるような構成や、家族の学習内容と絡めることのできるような構成になればよいでしょう。それぞれの内容の導入でも、ガイダンスの「家族・家庭の基本的な機能」に触れることが大切です。



◇授業での扱い方

○題材名「家庭分野の学習を始めよう」

○題材の目標

- ・自立と共生について理解し、家庭分野の学習のねらいを知り、よりよい生活を送ろうとする意欲を高める。
- ・小学校家庭科の学習を振り返り、中学校 3 学年間の学習の見通しを持って、家族・家庭の基本的な機能と結びつけて理解する。

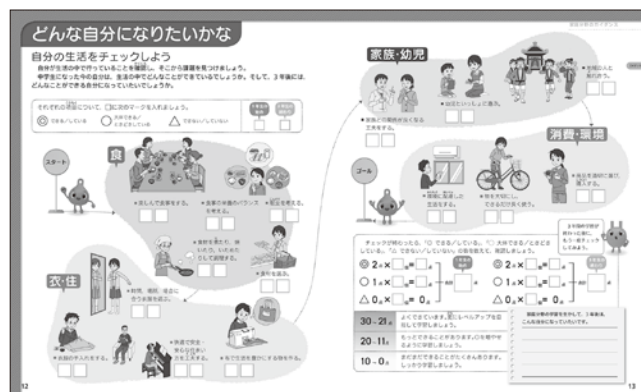
○授業の流れ①（1 時間扱い）

学習項目	学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間目	導入	・家庭分野の学習で、自立と共生を目指して学習していくことを確認する。
	展開	・小学校の学習内容を思い出す。 ・中学校での学習内容を確認し、3 年間の学習の見通しを持つ。 ・自分の生活をチェックする。
	まとめ	・家族・家庭の基本的な機能について知り、それぞれの学習内容と関連していることに気づき、家族・家庭の基本的な機能が果たされることの重要性に気づく。

◇1 時間で扱う場合の考え方

はじめに自立と共生について押さえることで、家庭分野の学習のねらいを伝えます。そして、小学校の学習内容を思い出し、中学校の学習内容について見通しを持つとともに、今の自分ができるところ、これから学習していくことを認識させます。小学校と中学校の内容が繋がっていることが分かるように示せると、より理解させやすいでしょう。更に、家族・家庭の基本的な機能について確認し、各内容がさまざまな機能と関わっていることに気づけるようにします。また、各内容における導入時にも、それぞれの内容がガイダンスの家族・家庭の基本的な機能につながっていることが理解できるようにしましょう。その際には、見方・考え方の視点もあわせて確認できると更によいでしょう。

簡単なレディネスチェックで、学習の見通しを持たせることができます。



▲教科書 p.12-13 「自分の生活をチェックしよう」



▲教科書 p.177 「家族や家庭の基本的な機能」

年 組 番 名

家庭分野の学習を始めよう

1 自分の成長を振り返り、これまでできるようになったことを思い出して書きましょう。

2 小学校の家庭科で学習したことや作ったものを思い出して書きましょう。

家族・家庭生活	消費生活	消費生活・環境

3 クラスやグループで発表したい、友達が発見した内容も含めて記入しておきましょう。

4 家族・家庭の基本的な機能について、() に言葉をを入れてまとめましょう。

() などの生活を送る機能	() 収入と消費に関わる機能	() 心身の安らぎを得るなどの機能
() を継承する機能	() を育てる機能	あなたの考えた機能 ()

5 家庭分野の内容について、これからできるようにしたいことや学習したいことを書きましょう。

ワークシート例▶
(1 時間扱いの場合)

学習項目		学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間 目	導入	・ 自立と共生を目指して学習していくことを確認する。	・ 自立と共生は家庭分野の学習における大切なキーワードであることを伝える。
	展開①	・ 1日の生活を振り返り、家族や自分の生活時間を知ること、自分のしていること、家族のしていることに気づく。 ・ 家庭の中で、自分や家族のためにできることを考える。	・ 自分や家族のためにできることは、班やクラスで共有し、友だちの意見の中から自分でできそうなことを見つけられるようにする。
2 時間 目	展開②	・ 小学校で作った物などを思い出し、小学校の学習内容を振り返る。 ・ 中学校での学習内容を確認し、3年間の学習の見通しを持つ。	・ 中学校の学習内容については、小学校の学習とつながっていることを知らせる。 ・ 先輩の製作品や、調理の写真などを見せて意欲を高める。
	まとめ	・ 家族・家庭の基本的な機能について知り、それぞれの学習内容と関連していることに気づき、家族・家庭の基本的な機能が果たされることの重要性に気づく。	・ 家族・家庭の基本的な機能と中学校の学習内容との関わりを示す。 ・ これからの家庭分野の学習に期待や意欲を持つことができるようにする。

「自立」と「共生」について押さえたあと、自分の1日の生活を見つめることから始まります。1日の生活は、各家庭や生徒のプライバシーに配慮して、架空の家族の生活などを提示します。

なるべく意欲が持てるように、これまでの先輩が作った布製作の作品や、調理実習の写真、幼児との触れ合い体験の写真などを見せ、中学生になればこんなことまでできるということが示せるとよいでしょう。最後に、家族・家庭の基本的な機能についてまとめ、機能を果たすことの大切さや、中学校の学習内容と関わっていることなどについて気づかせ、これからの学習への意欲を高めます。

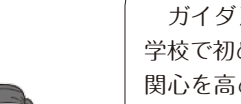


▲ワークシート例▶
(2時間扱いの場合)

[illegible]

学習項目		学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間目	導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭」とは何か考える。 ・「技術・家庭科（家庭分野）」とはどんな教科か知る。 ・「自立」と「共生」について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭」とは何か、「技術・家庭科（家庭分野）」とはどんな教科かを知らせる。 ・「自立」と「共生」を目指すことを伝える。
	展開①	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のこれまでの成長を振り返る。 ・これまでの成長に関わってきた人を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで、家族や地域など周囲の人々が自分の成長を支えてくれたことを再認識させる。
2 時間目	展開②	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活をチェックし、課題を見つける。 ・家庭分野の学習の進め方（問題解決的な学習）の流れや、「見方・考え方」の視点から学習内容を捉えていくことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中から自分なりの課題を見つけ、これから学習して生活をよりよくしていく意欲につなげる。 ・問題解決的な学習の流れの大切さや、そのあらゆる過程で4つの「見方・考え方」の視点から学習を捉えていくことの必要性を伝える。
	展開③	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や家族の1日の生活を見つめ、生活の中でどのようなことが行われているか挙げる。 ・自分にできる家庭の仕事を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や家族のしている家庭の仕事は、誰が行っているか、自分にできることはないか考えるように促す。
3 時間目	展開④	<ul style="list-style-type: none"> ・家族・家庭の基本的な機能について知り、それぞれの学習内容と関連していることに気づき、家族・家庭の基本的な機能が果たされることの重要性に気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で挙げた家庭での生活を、家庭や家族の基本的な機能にまとめていく。
	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校での学習内容を確認し、3年間の学習の見通しを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の学習とのつながりがあることを伝える。 ・家族・家庭の基本的な機能から学習内容へとつながることを示す。

まず、「家庭」や「技術・家庭科（家庭分野）」、「自立」、「共生」などについて言葉や概念を押さえるとともに、自立と共生を目指して家庭分野の学習をすることを伝えます。そして、生まれてからこれまでの生活を振り返り、自分の成長に関わってきた人々の姿に気づくようにします。家族はもちろん、地域の人々との関わりについても考えられるよう促しましょう。また、さまざまな世代の人々が関わってくれたことに気がつくことも、今後の学習へのつながりとなるでしょう。



ガイダンスは、家庭分野における中学校で初めての学習です。生徒の興味・関心を高めるため、楽しい雰囲気を始め、これからの学習につなげましょう。

生活を自らの意思で積極的に創っていく、主体的な生活者を育むことを目指していきましょう。

そして、自分や家族の1日の生活を見つめることで、家庭で行われているさまざまな活動を再認識し、そこから家族や家庭の基本的な機能をまとめていきます。また、家族・家庭の基本的な機能が果たされることの重要性も伝えましょう。最後に、家庭分野の学習内容を見通し、これからの学習への意欲を持たせます。

[illegible]

2

「和食」の調理

どのように扱えばよいのでしょうか？

◆学習指導要領「B 衣食住の生活」より

(3) 日常食の調理と地域の食文化

ア(エ) 地域の食文化について理解し、地域の食材を用いた和食の調理が適切にできること。

(内容の取扱いより)

ア(エ)については、だしを用いた煮物又は汁物を取り上げること。また、地域の伝統的な行事食や郷土料理を扱うこともできること。

◆学習指導要領解説より

- ・ 地域の食材のよさや食文化について理解し、それらを用いた和食の調理ができるようにする。
- ・ 主として、地域又は季節の食材を用いることの意義について理解できるようにする。
- ・ 地域又は季節の食材のよさに気付くことができるようにする。
- ・ だしと地域又は季節の食材を用いた煮物又は汁物を取り上げ、適切に調理ができるようにする。
- ・ 小学校で学習しだしの役割を踏まえ、だしの種類や料理に適しだしの取り方に気付くことができるようにする。

◇押さえないポイント

「食生活」の内容は、食事の役割や中学生の栄養の特徴、中学生に必要な栄養を満たす食事、日常食の調理と地域の食文化の3項目で構成されています。食生活の学びの後半に取り組むであろう、地域の食材・食文化・和食や、だし・汁物・煮物・行事食・郷土料理をキーワードにした学びは、それぞれ概要を理解した上で日常の調理に結びつくよう、調理実習の中で、だしや地域の食材を用いた献立を積極的に取り入れましょう。「和食」をきっかけに、調理だけでなく、エネルギーや資源、パートナーシップなどの視点まで広げられ、生徒自身が楽しく学べます。

///資料/// 和食について

「自然を尊ぶ」という日本人の気質に基づいた「食」に関する「習わし」を、「和食：日本人の伝統的な食文化」と題して、ユネスコ無形文化遺産に以下のような内容で登録されています（参考：農林水産省 HP）。

- ☆新鮮な食材（身近な海、山、里の食材）
- ☆優れた栄養バランス（旨味を上手に使った健康的な食生活）
- ☆自然の美しさ、季節感を表現（器や盛りつけ）
- ☆年中行事との関わり（家族や地域の絆）



和食とは、
どのようなものですか。

///資料/// 地域の食文化、郷土料理、行事食

畑や海などから食材を手にし、料理から食卓まで、多くの人の手を経て、ともに味わい人との絆を育む、かけがえのない価値のあるものです。

///資料/// 和食のだしと汁物の調味

和食のだしの作り方については、教科書 p.57 が参考になります。だしを取る食材として、煮干し、かつお節、昆布、干しいたけのほか、あご、干し白えびなどが使われています。汁物は塩、しょうゆ、みそなどで塩味をつけるのが一般的です。しっかりしただしは塩分を控えることができます。かつお節と昆布の一番だしには、旨みをより味わうため、塩をベースにした味つけが好まれます。味噌には、麴の違いで米味噌、麦味噌、豆味噌など、塩分濃度や熟成期間などの違いで白味噌、赤味噌があります。料理や好みに合わせて組み合わせましょう。

///資料/// 地域の食材の使用

地域で生産された食材をその地域で消費することを地産地消といいます。新鮮だから味がよく、栄養価が比較的高く、輸送や保存の観点から環境負荷が小さく、地域の食文化の伝承となるなどの良さがあります。

「これが、和食」と一言で言い切ることはできません。ただし、ユネスコの登録申請内容が、和食の説明に使われていることが多いです。



◇授業での扱い方（2 時間扱い）

○題材名「和食や郷土料理について知ろう」

○題材の目標

- ・調理実習に備え、和食について理解する。

○授業の流れ

学習項目	学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間目	導入	・本時の目標・内容・流れを知る。 ・小学校で学習した「だし」について復習する。 ・和食の概要について確認する。
	展開① だしについて考える	・事前に、食物アレルギーの有無を必ず確認する。 ・水筒を各自用意し、前後に飲みながら試食させる。
	展開② 一汁三菜について考える	・実物（または紙面上）で確認できるよう、ご飯茶碗、汁椀、箸、箸置きを準備しておく。
2 時間目	展開③ 地域の食材・行事食・郷土料理	・1人30秒～1分程度の短い時間で進める。 ・栄養や季節感、願い、いわれなどについて触れて発表するように伝える。
	まとめ	・次回の調理実習後に体験をまとめ、更に郷土料理や行事食を中心に和食について調べて、その良さなどを情報機器を使って、工夫した発表（グループで5分程度）をすることも伝える。

◇指導のヒント 授業の発展例

●和食についてインタビュー調査をする

和食と関連のある専門店や調理学校を訪れ、インタビュー調査をし、まとめて発表する。

●地域の生産者をつながる

生産地を訪れ、生産者へインタビューしたり、地域の郷土料理や行事食を作ることができる人を招いて、話を聞いたり、調理実習の指導を受けたりして、まとめて発表する。

●地域に関して、海外の例を知る

ファーストフードと対極に位置するスローフードを活かし、「地域」を意識したスローシティ（イタリア語ではチッタスローといい、協会ができています）などの例に関して情報機器を使って調べ、発表し、情報を共有する。また、自分の地域に当てはめ、何ができるかを考えさせる。

●和食の良さを海外の人に紹介する

和食の概要や箸の持ち方などを海外の人に紹介する、という視点から授業に取り組ませると、より伝統文化を大切にしようとする意識を高めることができる。

だし汁の作り方

●混合だし（昆布とかつお節）

材料と分量（1人分）

水……………170 mL
（湯沸分 20 mL を含む）
昆布………3 g（水の 2%）
かつお節………3 g
（水の 2%）

調理の手順

- ① 昆布は、ぬれ布巾で拭く。鍋に昆布と水を入れ、30分以上つける。
- ② そのまま中火にかけ、湯沸前に昆布全体に気泡が付いたら取り出す。
- ③ 沸騰したらかつお節を入れ、再び沸騰したら火を消す。かつお節が気味まで動かさない。
- ④ かつお節が沈んだら、ざるにキッチンペーパーを敷いて静かにこす。

材料メモ
昆布、かつお節、煮干し、干しいたけなどに含まれるうまみ成分は、和食の

煮干しだし

材料と分量（1人分）

水……………170 mL
（湯沸分 20 mL を含む）
煮干し………4.5 g
（水の 3%）

調理の手順

- ① 煮干しは、ぬれ布巾で拭く。鍋に煮干しと水を入れ、30分以上つける。
- ② そのまま中火にかけ、湯沸前に煮干し全体に気泡が付いたら取り出す。
- ③ 沸騰したら火を消す。

材料メモ
煮干し、干しいたけなどに含まれるうまみ成分は、和食の

▲教科書 p.57
「だし汁の作り方」

ワークシート例▶

和食や郷土料理について知ろう

1 ユネスコ無形文化遺産における「和食」の概要について、() に当てはまる言葉を右から選びましょう。

① 多岐で () な食材とその持ち味の尊重
② () バランスに優れた健康的な食生活
③ () の美しさや季節の移ろいの表現
④ 正月などの () との密接な関わり

2 小学校で学習した「だし」について調べていることを書き出しましょう。

3 だしの種類について、() に当てはまる言葉を左から入れましょう。

主に、① () から取るだし、② () から取るだしがあり、
その両方から取るだしは③ () 効果で旨みを強く感じる。
他にも④ () などからだしが取れる。

4 一汁三菜の配置や箸の持ち方について説明しましょう。

① 汁椀・ご飯茶碗など一汁三菜の配置、箸などの配置 ② 箸の持ち方、初めて使う人に教える方法を考えて図をかくにしましょう。

5 友達が調べてきた「地域の食材・行事食・郷土料理」の発表を聞き、感想を書きましょう。

年 組 番 名前

学年行事
新習
実習
自然



「蒸す」調理

蒸し器を使うのでしょうか？どんな題材が考えられますか？

◆学習指導要領「B 衣食住の生活」より

(3) 日常食の調理と地域の食文化

ア（ウ）材料に適した加熱調理の仕方について理解し、基礎的な日常食の調理が適切にできること。

（内容の取扱いより）

エ（ウ）については、煮る、焼く、蒸す等を扱うこと。また、魚、肉、野菜を中心として扱い、基礎的な題材を取り上げること。

◆学習指導要領解説より

- ・蒸すについては、ゆでる、いためる調理などと比較することにより、水蒸気で加熱する蒸し調理の特徴を理解できるようにする。
- ・野菜やいもなどを蒸したり、小麦粉を使った菓子を調理したりするなど、基礎的な調理を扱うようにする。

◇押さえないポイント

小学校で扱う加熱調理の「ゆでる」、「いためる」に加えて、中学校では「煮る」、「焼く」、今回から入った「蒸す」を取り扱うことになっています。加熱調理の基礎を義務教育中に扱うこととなりました。「蒸す」調理としては、蒸し器を用いて野菜やいもを蒸す、小麦粉

を使ったお菓子を調理する、など、温度調節の必要のない簡単な蒸し料理が想定されています。茶わん蒸しなどは温度調節が難しいため、授業での扱いは求められていません。加熱調理には、ほかに「揚げる」もありますが、安全面の配慮より高等学校での扱いとなっています。

◇授業での扱い方（1 時間扱い）

○題材名「蒸す調理に向けて」～蒸すってどういうこと？～

○題材の目標

- ・調理実習に備え、「蒸す」調理について理解する。

○授業の流れ

学習項目	学習活動・内容	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・電子レンジの掃除方法について考えることで、水蒸気や蒸すことに関して学習することを知る。 ・水蒸気に関して更に関心を深め、本時は実際に蒸し器で調理した野菜やいもを試食することを知り、学ぶ意欲を増す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子レンジの中でコップに入れた水を沸騰・蒸発させ、水蒸気で汚れを落としやすくし、柔らかい布などで拭く掃除方法があることを伝える。 ・「水蒸気は目に見えるの？」と問いかけるなど、小学校理科の学習を思い出させる。 ・示範用の蒸し器に水を入れ火にかけ、野菜やいもなどを人数分準備しておく。
展開①	<ul style="list-style-type: none"> ・蒸し器の使い方、安全への配慮を知る。 ・調べてきた蒸し料理の名前と、良い点を挙げる。 ・蒸しあがった野菜やいもを試食する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で蒸し料理について調べてくるよう伝えておく。 ・蒸し器の構造などを見せ、食材を蒸し器で蒸しながら、蒸し料理についての授業を展開する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・次回は蒸し料理を取り入れた調理実習に向けて準備をすることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調理実習に向けて、蒸し料理や注意点についてまとめてくるよう伝える。

/// 資料 /// 水蒸気について

通常蒸し器内の水蒸気の温度は約 100℃に達するので、やけどの危険性を事前に徹底して知らせる。水蒸気は目に見えないので、蓋から吹き出すものは湯気である。

/// 資料 /// 蒸し終わってからの扱い

蓋は蒸気が手や腕に当たらないよう開ける。蒸し器から食材や器を取り出すときは、乾いた布巾や鍋つかみ、軍手などを使用する。濡れた布巾などは熱伝導がよいので、やけどにつながり危険である。

資料「蒸す」調理の方法

●準備物

- ・ 蒸し器
(必要に応じて)
- ・ 蒸し布巾
- ・ 器
- ・ 布巾、軍手、トングなど

4人班で調理するときは3段の蒸し器が使い勝手がよいでしょう。

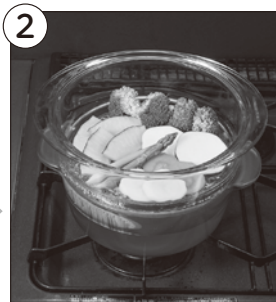


●「蒸す」調理の特徴

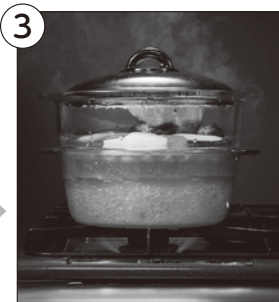
- ・ 水蒸気中で加熱する調理法。
- ・ 加熱中は触れないため食品の煮崩れが起こりにくい。
- ・ 栄養素などの成分はほとんど流出しない。
- ・ 全体が蒸気で覆われるため加熱むらが少ない。
- ・ 加熱中に調味はできない。



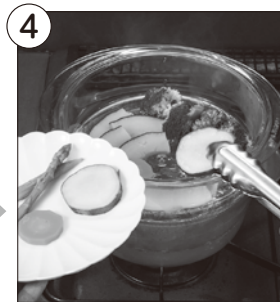
蒸し器に水を入れ、上段も乗せて蓋をして火にかける(強火)。
※空焚きに注意する。



沸騰して蒸気が出てきたら、いったん火を止め、蓋を取って、鍋に触れないように気をつけて器や食材を入れる。
※やけどの危険があるので、上段を外して食材を入れることもできる。



すぐに蓋をして、再度蒸気が上がるまでは強火、蒸気が上がったら食材に応じた火力で指定時間加熱する。
※蒸しパンのような水滴が落ちない方がよい場合は、蓋に乾いた布巾を巻いて蒸す。



火を止めて蓋を開け、鍋に触れないように注意しながら、器は乾いた布巾や軍手などで、食材はトングなどで持って蒸し器から取り出す。

実習例「蒸す」調理の題材例

●かぶら蒸し風

想定時間 30分



●材料 (4人分)

大根	400g	くずあん	
卵白	1個分	だし汁	280ml
塩	1.6g	醤油	18ml
白身魚	240g	片栗粉	12g
塩	2.4g	水	24ml
酒	8ml		
にんじん	20g		
しめじ	40g		
絹さや	4g(2本)		

▼作り方

- ①白身魚に塩と酒を振りかけておく。
- ②しめじは石づきを取ってほぐし、にんじん、絹さやはせん切りにする。
- ③大根は皮をむいてすりおろし、ざるにのせて自然に水を切る。
※すりおろして水気を切ると、およそ最初の半分の量になる。
- ④③に卵白、塩を加え、よく混ぜる。
- ⑤器に①、②を入れ、それらが見えないように④のをせ、器の蓋を閉めて沸騰している蒸し器に入れて強火で15分蒸す。
- ⑥くずあんを作る。鍋にだし汁、醤油をひと煮立ちさせ、水溶き片栗粉を少しずつ加えて沸騰させ、火を止める。
- ⑦蒸しあがった器を取り出し、蓋を取って⑥をかける。

●ぶた肉と野菜の重ね蒸し

想定時間 30分



●材料 (4人分)

ぶた肉(薄切り)	320g
白菜	200g
にんじん	60g
しいたけ	40g
ポン酢	240ml
大根	240g

▼作り方

- ①ぶた肉を5cm程度、白菜は4～5cmの食べやすい大きさに、にんじんは皮をむいて2mm程度の半月切り、しいたけは石づきを取り3mm程度の薄切りにする。
- ②器にぶた肉、白菜、にんじん、しいたけの順を繰り返し、立てるようにしてきれいに並べる。
- ③沸騰している蒸し器に②を入れ、蓋に布巾を巻いて強火で8～9分蒸す。
- ④大根おろしを入れたポン酢で食べる。



和服の文化

どのように扱えばよいのでしょうか？

◆学習指導要領「B 衣食住の生活」より

(4) 衣服の選択と手入れ

ア (ア) 衣服と社会生活との関わりが分かり、目的に応じた着用、個性を生かす着用及び衣服の適切な選択について理解すること。

(内容の取扱いより)

(4) のアの (ア) については、日本の伝統的な衣服である和服について触れること。また、和服の基本的な着装を扱うこともできること。

◆学習指導要領解説より

- ・ (社会生活を営む上での機能の中で) 和服は日本の伝統的な衣服であり、冠婚葬祭や儀式等で着用することや、地域の祭りなどで浴衣を着用することなどについて触れるようにする。
- ・ 和服と洋服の構成や着方の違いに気付くようにするとともに、和服の基本的な着装を扱うことも考えられる。

◇押さえないポイント

衣生活の内容において「和服について触れる」と明記されました。しかし、どのように扱えばよいのか悩まれている先生方も多いようです。また、この改訂を受け、和服の着装体験をする学校も増えてきているのも現状です。

着装体験から学ぶことは多くあります。しかし着用することそのものが目的ではなく、衣服と社会生活との関わりを理解し、目的に応じた着用や個性を生かす着用および選択について理解することが基本となります。そこで、着装の学習を行う際は、洋服とのつくりの違いや和服の基本的な着方を調べるなどした上で、着用することも大切です。

和服という、自分の生活とはかけ離れた印象を持つ生徒が多いかもしれません。そこで、ライフサイクルの中で和服はどのような目的・場面で着用されてきたかを、具体的に振り返らせることで、改めて、身近な日本文化だということを感じさせたいものです。また、グローバル化が進む中、日本人として、自国の文化を大切にする思いを持ちつつ、他国の良さを感じられる生徒を育成することも大切です。



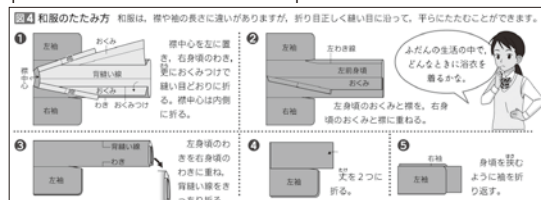
まずは、教師である私たちが、和服についての知識及び技能を身につけたいものですね。また、道具を揃えるのが難しいということも課題として挙げられますね。

生徒たちにとって、和服は着るのが難しい、面倒だという意識が高いようですが、実際に浴衣の着用体験を通して、着心地や気持ちの変化などを感じさせ、改めて、着物を着用する楽しさや、昔から受け継がれてきた日本文化の良さに気づかせたいものです。しかし、実際に和服を着用させることが難しい場合は、和服(浴衣など)を広げてみたり、たたんだりすることで、洋服との構成の違いを実感することができます。



▲教科書 p.109「浴衣の着方」

▼p.109「和服のたたみ方」



道具の準備や着付けにおいて、保護者や地域の人々に協力してもらうことも考えられます。また、積極的にゲストティーチャーを活用している学校もありますよ。



◇授業での扱い方（2～3時間扱い）

○題材名「和服の文化に触れよう」

○題材の目標

- ・浴衣のつくりや着方、たたみ方を学ぶことを通して、和服と洋服の構成の違いを知り、衣文化への関心を持つ。
- ・実際に浴衣を着用することを通して、和服への理解を深め、伝統・文化を継承しようとする意欲を持つ。

○授業の流れ

学習項目		学習活動・内容	指導上の留意点
1時間目	和服文化を知ろう	<ul style="list-style-type: none">・和服の文化について知る。・ライフサイクルの中で着物を着用する場面を考える。・さまざまな和の文様や家紋から、そこに込められている思いを考える。	<ul style="list-style-type: none">・具体的な写真などを見せ、自分自身の生活を振り返らせる。・身近な話題として、東京オリンピック、パラリンピックのエンブレムなどを取り上げるとよい。
2～3時間目	浴衣を着よう	<ul style="list-style-type: none">・グループで協力して浴衣を着用したり、たたんだりする。・和服文化を次世代につなげるためにできることを考える。	<ul style="list-style-type: none">・実際に着せて見せたり、動画を活用したりすることで具体的に浴衣の着方を提示する。・班ごとに課題解決ができるよう、資料や動画を提示する。

◇指導のヒント① ゲストティーチャーの活用

和服の指導を難しいと感じている先生は多くいます。また、教師一人で、クラス全員に着装体験をさせるのはなかなか厳しいことです。そこで、和服の専門家に授業に参加してもらおう方法があります。また、地域の高齢者や保護者に協力してもらってもよいでしょう。授業参観や学校公開日などをこの日に当てることで協力を得ることも考えられます。

◇指導のヒント② 道具（浴衣）の準備

浴衣を持っている生徒については保護者へ依頼し、持参してもらうことができます。しかし、男性用を揃えるのはなかなか難しいものです。そこでレンタルを活用することも考えられます。班（3～4人）に1着あると全員が時間内に着用することが可能になります。

◇指導のヒント③ 他教科での実践

総合的な学習の時間で、浴衣の着装体験を行う学校もあります。日本の伝統文化を知るといったテーマで、総合学習で取り上げられるような場合には、学校教育全体と家庭分野の学習とを結びつけて、短い時間の中で効果的に学べるように工夫しましょう。


◇指導のヒント④ ICT 機器の活用

着装体験の前に、着付けの仕方やたたみ方の動画を見せることはもちろんですが、タブレット型パソコンなどを班に1台ずつ用意すれば、班ごとに確認し、課題を解決しながら着付けを進めることができます。

年 組 番 名前


和服の文化に触れよう

1 日本には、草・花・動物・自然などを表す伝統的な柄が多くあります。次の文様にはどのような意味があるでしょうか。正しいものを線ですなませましょう。




① 亀甲（きっこう）

亀の甲羅の形。長生きするよう願いが込められている。



② 旗本（はたぼし）

旗のようにすくなくと舞つように。子供の進歩に使われる。



③ 麻の葉

歌舞伎俳優の「吉野市松」の当たり役となったときの衣装の柄。

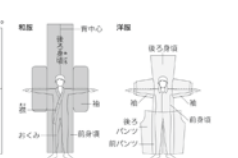
2 和服と洋服の構成の違いをまとめましょう。

和服

（ ）に縫った布を縫い合わせ（ ）に形作られている。

洋服

平面の布を体に合わせて縫製した（ ）のあるパーツを縫い合わせ（ ）に形作られている。



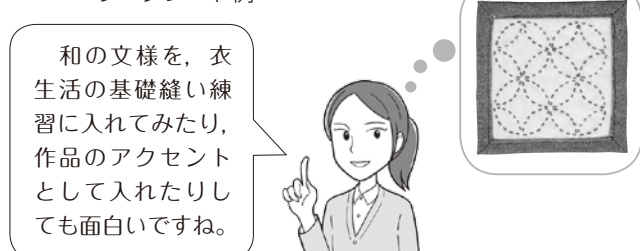
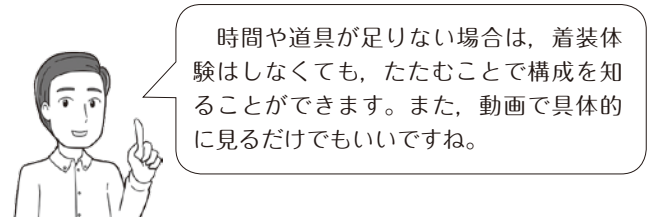
3 実際に浴衣を着て、感じたことを記録しましょう。

(1) 浴衣を着て歩いたり動いたりした感じはどうでしたか。

(2) 洋服と比べて浴衣を着るとどんな気持ちになりましたか。

4 今日の学習を振り返りましょう。

▲ワークシート例



5

資源や環境に配慮した製作

どんな題材を扱うとよいのでしょうか？

◆学習指導要領「B 衣食住の生活」より

(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作

ア 製作する物に適した材料や縫い方について理解し、用具を安全に取り扱い、製作が適切にできること。

イ 資源や環境に配慮し、生活を豊かにするために布を用いた物の製作計画を考え、製作を工夫すること。

(内容の取扱いより)

(5) のアについては、衣服等の再利用の方法についても触れること。

◆学習指導要領解説より

- ・生活を豊かにするための布を用いた製作について、課題をもって、製作する物に適した材料や縫い方、用具の安全な取扱いに関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、資源や環境に配慮して製作計画を考え、製作を工夫することができるようにすることをねらいとしている。
- ・生活を豊かにするための布を用いた製作とは、身の回りの生活を快適にしたり、便利にしたり、さらに資源や環境に配慮したりするなど、自分や家族、地域の人々の生活を豊かにする物を製作することである。布を用いた製作は、生活に役立つばかりではなく、家族や地域の人々との関わりを深めたり、生活文化への関心を高めたり、持続可能な社会の構築について考えたりすることにつながり、生活を豊かにするための営みに係るものである。
- ・製作を通して、自分自身が豊かな気持ちになることに気付くことができる。
- ・衣服等の再利用など布を無駄なく使うことが、資源や環境への配慮につながることを理解し、製作を工夫することができる。
- ・「A家族・家庭生活」の(2)「幼児の生活と家族」の学習との関連を図り、幼児の生活を豊かにするための物を製作したり、「C消費生活・環境」の(2)「消費者の権利と責任」の学習との関連を図り、環境に配慮した生活を工夫するための物を製作したりすることなどが考えられる。
- ・製作する物に適した材料や縫い方については、衣服等を別の用途に作り直したり、デザインを変えたりするなどの、再利用の方法について触れるようにする。再利用の方法については、地域の高齢者や専門家などから教えてもらう活動なども考えられる。
- ・生徒が製作の目的を明確にもち、個性や工夫が生かせるよう配慮する。
- ・製作を通して、成就感を味わうとともに、自分や家族、地域の人々の生活を豊かにすることの大切さを実感できるよう配慮する。
- ・製作品を活用することを通して、資源や環境を大切にしようとする態度の育成につなげるよう配慮する。
- ・製作計画については、例えば、生活を豊かにするための目的に合っているかどうか、資源や環境に配慮する視点として、衣服等の再利用や布を無駄なく使うなどの工夫があるかどうかについて検討し、計画を見直して改善する活動などが考えられる。
- ・布を用いた物の製作については、例えば、着用されなくなった衣服を他の衣服に作り直す、別の用途の物に作り替えるなどの再利用の仕方を考えたり、色や柄の異なる複数の布を組み合わせる布の無駄のない使い方を考えたりして、製作を工夫する活動などが考えられる。



◇押さえてたいポイント

B (5) のアについては、製作する題材が決まってしまうの方が学習しやすいでしょう。B (5) のイについては、布を用いた製作は、生活に役立つばかりではなく、さまざまな視点から良い点があることを考えることから進めてみても良いでしょう。

授業ではさまざまな布地を準備し、実際に手に触れて、柄や肌ざわり、布の大きさなどを確認し、どんな物を作ることができるかななどを話し合わせながら製作が楽しみになるような指導を心がけましょう。布地を見て、どんな物が製作できるかを考えさせ、ある程度生徒から案が出たら、教師側から具体的な物として、例えば「教科書の題材の中で、製作することのできる物はないかな」など、題材を絞るようにアドバイスをしてみるのもよいでしょう。その中から例えば「トートバッグ」などを紹介し、またサイズを小さくすると製作しやすいことなども提案するなどして、題材の決定を促します。つまり、最初から題材を教師から提示するのではなく生徒とともに題材を決めることができるような授業の流れをつくるのが大切です。

また、最近ではキット教材を利用する場合も多いですが、手ぬぐいなどの大きさや素材がおおよそ決まっています（綿、約 33cm × 90cm）、布端の処理が不要な布を活用することで、比較的効率良く製作ができます。生徒が自分でお店に行き、柄や色などを選んで購入しやすい布地でもあります。そのため、「計画」「準備」の段階から製作の手順に沿って、生徒が自分の力で最初から進めていくことができます。授業でも実際に「手ぬぐい」を見せて、日本の文様などの和服の内容に触れるなどして、日本の伝統文化への関心を高めることもできるような授業展開も考えられます。製作の工夫として、丈夫な別布を用いること、余り布を用いることなども考えられます。

計画や準備の段階から、生徒が工夫をして製作に取り組める方法はありませんか？



手ぬぐいなどの大きさ、素材がある程度決まった布地を活用してはどうでしょう。「ミニトートバッグ」などのサイズの小さい題材にすると、価格も手ごろで、デザイン次第で布を無駄なく使えます。布端の処理も不要なため、自分なりの工夫を考え、作る時間に当てることができます。デニムなどの衣服の布地と組み合わせて丈夫にするなど、技能に応じた工夫もさまざまです。



///資料/// 衣服のリサイクル

衣服のリサイクルは、自治体や企業などが回収するための費用や、保管するための費用、繊維の種類などにより仕分けをするための費用などがかかり、廃棄する方が安く、なかなか進まない現状があります。そのため、わが国では年間約 33 億着もの衣服が廃棄されています。これは、日本人 1 人が毎年約 30 着もの衣服を捨てていることになります。

このような現状の中で、資源や環境に配慮した視点から、生活を豊かにするための布を用いた物の製作を行うことは、持続可能な社会の構築を目指す上でも今後ますます大切になってきます。

///資料/// 「リ・ファッション」の 3R

衣服には、「リ・ファッション」の 3R という考え方があります。3R とは更に大切に長く用いるために、傷んだところを補修するリペア、自分の体型や機能、好みや流行に合わせて補正するリフォーム、異なるデザインや別の用途の物に作り直すリメイクのことをいいます。授業でも、これらの視点から題材を扱うことも考えられます。材料となる衣服は、家庭の中で家族が着ていた衣服の中で着なくなった物から探し、利用することが考えられます。適した材料や縫い方、用具の安全な取り扱いに関する基礎的・基本的な知識及び技能を身につけ、さまざまな製作に取り組めるようにしましょう。

○リペア ズボンやスカートの裾のまつり縫い、ボタン付け、スナップやホック付け、ほころび直しなどで必要な衣服を実際に補修しましょう。

○リフォーム 中学生の著しい身体の成長により短くなった長袖を半袖にする、長ズボンを半ズボンにする、などの方法があります。

○リメイク 長袖の切った袖を再利用してペットボトルカバーにする、長ズボンの切ったズボン丈を再利用して靴袋にするなどの方法のほか、バンダナや手ぬぐい、タオルからお弁当包み、ポケットティッシュケース、カフェエプロンなどの製作も考えられます。

◇授業での扱い方（10 時間扱い）

○題材名「ミニトートバッグを製作しよう」

○題材の目標

- ・自分や家族の生活をよりよくする工夫をして、ミニトートバッグを製作できる。
- ・資源や環境に配慮した工夫を取り入れることができる。

○授業の流れ

学習項目		学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間 目	計画・準備	・資源や環境に配慮して自分や家族の生活をよりよくする物の製作計画を考える。 ・題材に適した材料の準備をする。	・弁当箱などを入れるバッグ製作について、自分なりの工夫を取り入れて計画を立てるよう伝える。 ・日本の伝統的な布である「手ぬぐい」を紹介する。
2 時間 目 9	製作	・製作をする。	・自分なりの工夫点を取り入れて、型紙の準備、しるし付け、裁断、縫製を進めさせる。
10 時間 目	まとめ・発表	・製作品の発表会をする。	・実際に生活で活用し、使い心地を確かめる。 ・評価をクラスの皆で話し合い、発表する。

◇指導のヒント ミニトートバッグの工夫例

コンパクトなミニサイズのバッグを製作することで、製作時間を短縮し、生徒それぞれの工夫点を引き出すことができます。自分や家族の生活をよりよくする工夫点では、資源や環境に配慮する視点から、どのような物があると便利かを考えさせましょう。ミニトートバッグは、弁当箱などを入れたり、大きなバッグに入れてバッグインバッグとしてかばんの中を整理したりすることができます。ほかにも、余り布を活用して底布を付けたり、ジーパンの衣服を一部に再利用したり、裏布を付けたり、ポケットの大きさや付ける位置を変えたりするなどの工夫が考えられます。また、不要になった包装リボンや 100 円ショップなどで手に入れやすいフェルトやボタン、レースなどを用いてアレンジができます。

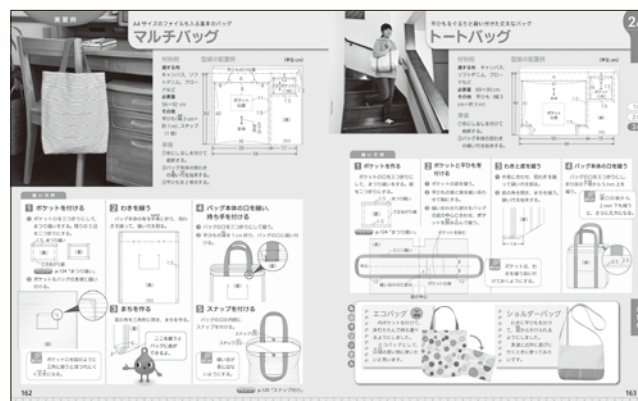


◀底布に小さくなったジーパンの布地を使用し、丈夫にしました。

手ぬぐいを折りたたみ、裏布付きのバッグにしました。▼



手ぬぐいからバッグだけでなく、家庭の中にある余った布や衣服で、ほかにも何か作ることができるのではないかと、など次の製作意欲へとつなげることができるような授業展開とし、ものづくりの楽しさを大切にしたい実践を心がけるとよいでしょう。



▲教科書 p.162-163 「マルチバッグ」「トートバッグ」

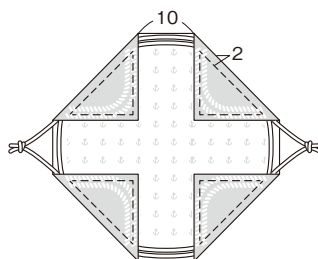
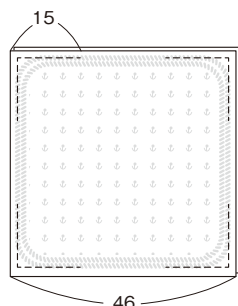
年 組 番 名	
生活を豊かにする物を、布を用いて製作してみよう	
1 布を用いて製作する物を考えよう。	
①自分や家族の生活の中で、「あるといいな」と思う物を書き出しましょう。	
②家庭の中で、着ない衣服や使わないリボン、ハンカチ、タオル、手ぬぐいなどはないか探しましょう。	
③①の中から②の材料を使って自分で作ることでできそうな物を選びましょう。	
①の（ ）を、②の（ ）を用いて製作したい。	
2 布を用いて製作する物を具体的に決めて、製作計画を立てよう。	
製作する物	使用する人
使用目的	
使用場面	
デザイン（完成図）	友のデザインにした理由
	生活を豊かにするために工夫した点
	製作の手順や時間、縫い方
使用する布の種類と分量	使用するその他の材料
●作り方	
自己評価 活用して満足である（ はい ・ いいえ ）	

▲ワークシート例

お弁当包み ～広げて、ランチョンマットとして使おう～

材料例 ◎バンダナ(約46cm×46cm) 2枚 ◎ひも(約140cm) 2本

- 1 2枚のバンダナを外表に合わせ、4つの角を図のように縫う。
- 2 図のように角を折り、ひも通し口を縫って、左右の両側からそれぞれ1周ひもを通す。



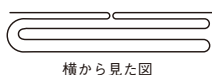
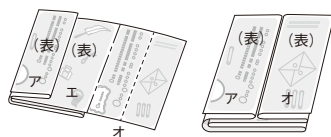
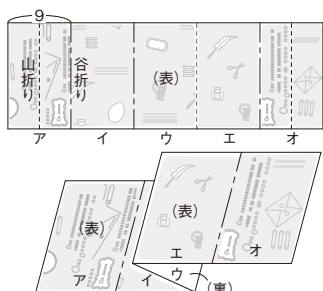
広げた状態▶



ポケットティッシュケース ～ポケットに小物を入れて持ち歩こう～

材料例 ◎バンダナ(14cm×45cmに裁断) 1枚

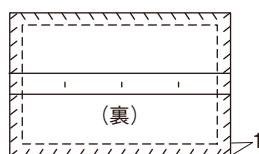
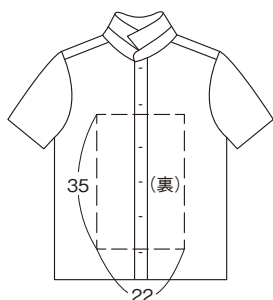
- 1 布の裏側に9cmの幅でしるしを付け、図のように、イの上にウ、その上にエがくるように折る。
- 2 アとオを半分に折ってエの上に重ね、折り山をすき間なく合わせる。
- 3 両端から1cmのところを縫う。縫い始めと縫い終わり、出し入れ口は返し縫いをする。出し入れ口から表に返し、ポケットの内側にスナップを付ける。



ティッシュボックスカバー ～前立てからティッシュを出そう～

材料例 ◎シャツやブラウス 1枚 (ボタンの付いたもの)

- 1 シャツやブラウスのボタンを留めて裏返し、ティッシュボックスの大きさに合わせて4辺を縫う。
- 2 縫い代を1cmにとって裁断し、布端をかがり、ボタンをあけて表に返し、ティッシュボックスを入れる。



大きさを工夫すると、クッションカバーや、お弁当箱入れなど、前立てのボタンを工夫してさまざまな物を作ることができます。





</

◇授業での扱い方（1時間扱い）

○題材名「住まいの安全について考えよう」

○題材の目標

- ・家庭内事故の現状を理解する。
- ・家庭内事故の防止のためにできることを考える。

○授業の流れ

学習項目	学習活動・内容	指導上の留意点
導入	・各自で家の中の危険箇所と起こりうる事故を考える。	・プリントに家の中の危険箇所と起こりうる事故を記入させる。
展開① 家庭内事故死の状況	・家庭内事故死が交通事故死よりも多いこと、幼児や高齢者に多いこととその主な原因を理解する。	・教科書の資料（p.135 表 1、図 1）を活用し、生徒に考えさせる。
展開② 事故の原因と防止	・幼児、高齢者それぞれの事故の原因がなぜ起きるのかをそれぞれの立場から考えさせる。 ・多様な年齢に対応し、防止策を考える。	・幼児の目線や行動、高齢者の体の状況など多様な年齢の人の立場から考えさせる。 →本冊子 p.45「簡単にできる高齢者の疑似体験」
展開③ 住まいの中のバリアフリー	・それぞれの人の立場を理解した対策とともに誰もが快適に使えるように考えられたユニバーサルデザインについて理解する。	・家庭内や公共施設でもユニバーサルデザインの例を示すなど視覚教材を活用する。 ・家庭での課題として、まち歩きで調べさせてもよい。
まとめ	・暮らしやすい住まいのためにさまざまな工夫があり、それらを自分の住まいに生かすことを考える。	

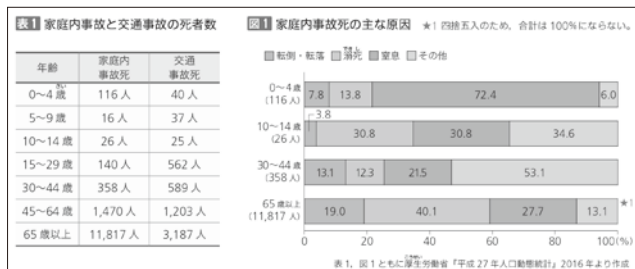
◇指導のヒント 幼児や高齢者の学習との関連

中学校における住生活の内容は、「安全」を重視して進められるようにしましょう。特に、家庭内事故については、資料などから幼児や高齢者に家庭内事故死が多いことに気づかせ、自然な流れで幼児や高齢者の立場から実践ができるようにしたいものです。そして、さまざまな危険箇所を見つけ、対策方法を考えさせるようにしましょう。コンピュータなどを活用したり、実際に疑似体験を行ったり、地域に出かけてバリアフリーやユニバーサルデザインを調べたりしてもよいでしょう。

「A 家族・家庭生活」の幼児や高齢者の内容と関連させるためには、年間指導計画の工夫も必要です。うまく関連づけて学習できるよう検討しましょう。

普段何気なく過ごしている家の中も、ちょっとした工夫で安全・快適な環境に変えることができます。生徒たちが少しでも自分の家のことに目を向けるきっかけとなるとよいでしょう。

居間や台所といった家族で使う空間にも家族の一員として快適に暮らすためにできることがあるはず。安全に続けて、空気の汚れの観点から、汚れの対策やより快適に暮らせる工夫を考えさせましょう。



▲教科書 p.135

「家庭内事故と交通事故の死者数」「家庭内事故死の主な原因」

年 組 番 名前

住まいの安全について考えよう

1 あなたの家の中で危険だと思われる場所を思い出して、まとめよう。

危険だと感じる場所	危険だと感じる理由	起こりうる事故	対策
幼児			
高齢者			

2 幼児や高齢者の立場になって考えると、どのような場所が危険か、教科書 p.135 表 1、図 1 から考えよう。

危険な場所	起こりうる事故
幼児	
高齢者	

3 家庭内事故を防ぐための対策を 1 の表に記入してまとめよう。

4 バリアフリーとユニバーサルデザインについてまとめよう。

バリアフリー	ユニバーサルデザイン

5 あなたの住んでいるまちにあるバリアフリーやユニバーサルデザインをまち歩きやコンピュータなどを利用して調べよう。

どこに	どのような

▲ワークシート例



計画的な金銭の管理と 三者間契約(クレジットカード) 中学校では何を押さえばよいのでしょうか？

◆学習指導要領「C 消費生活・環境」より

(1) 金銭の管理と購入

ア (ア) 購入方法や支払い方法の特徴が分かり、計画的な金銭管理の必要性について理解すること。

ア (イ) 売買契約の仕組み、消費者被害の背景とその対応について理解し、物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理が適切にできること。

イ 物資・サービスの選択に必要な情報を活用して購入について考え、工夫すること。

(内容の取扱いより)

ア (1) 及び (2) については、内容の「A 家族・家庭生活」又は「B 衣食住の生活」の学習との関連を図り、実践的に学習できるようにすること。

イ (1) については、中学生の身近な消費行動と関連を図った物資・サービスや消費者被害を扱うこと。アの (ア) については、クレジットなどの三者間契約についても扱うこと。

◆学習指導要領解説より

- ・ キャッシュレス化の進行に伴って多様化した購入方法や支払い方法の特徴が分かり、収支のバランスを図るためには、生活に必要な物資・サービスについて金銭の流れを把握し、多様な支払い方法に応じた計画的な金銭管理が必要であることについて理解できるようにする。
- ・ 支払い方法の特徴については、支払い時期（前払い、即時払い、後払い）の違いによる特徴が分かるようにするとともに、クレジットカードによる三者間契約を取り上げ、二者間契約と比較しながら利点と問題点について理解できるようにする。
- ・ 計画的な金銭管理の必要性については、収支のバランスを図るために、生活に必要な物資・サービスについての金銭の流れを把握し、多様な支払い方法に応じた計画的な金銭管理が必要であることを理解できるようにする。その際、収支のバランスが崩れた場合には、各家庭におけるそれぞれの状況に応じて、物資・サービスが必要かどうかを判断し、必要なものについては、優先順位を考慮して調整することが重要であることを理解できるようにする。
- ・ 生活に必要な物資・サービスには、衣食住や、電気、ガス、水、交通などのライフラインに係る必需的なものや、教養娯楽や趣味などに係る選択的なものがあることに気付くようにする。

◇押さえないポイント

金銭の管理においては、小・中・高等学校の内容の系統性を踏まえましょう。中学生が生活する上で必要な支出を取り扱い、計画的な金銭管理の必要性に気づかせましょう。小学校では自分のおこづかいの範囲であった収入と支出ですが、中学校では自分だけでなく、家庭全体でどのようなことにお金が使われているかを知る必要があります。

キャッシュレス化に伴い、中学生の生活にもクレジットカードによる支払いも身近なものとなりつつあります。これまで高等学校の内容であったクレジットカードの仕組みである三者間契約についても取り上げましょう。



計画的な金銭の管理では、何を扱えばよいのでしょうか？
高等学校の内容を一部中学校で扱うことになったのですか？

小・中・高等学校の系統性を持たせることは重要ですが、これまで高校で学んでいた内容とは違います。中学生の生活に必要なライフラインや衣食住などの支出を見える化したり、自身で管理している金銭について中長期的な視点を持ったりする機会を作りましょう。



○題材名「私たちの生活にどれくらいのお金が使われているのか考えよう」

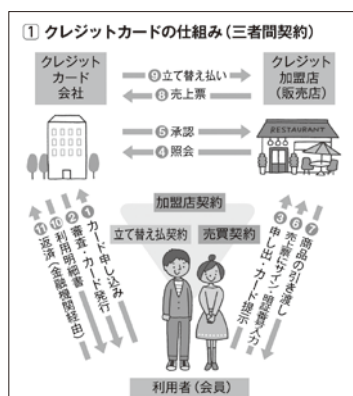
- ・物資・サービスの選択、購入および活用、金銭の管理に関する知識を身につけている。

- ・物資・サービスの選択、購入および活用、金銭の管理についての情報を収集し、活用しようとする。

学習項目		学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間目	自分の生活に必要なもの	・ 今朝、起床して登校するまでの行動とのために必要な物資やサービスを想起する。	・ 毎日の生活が物資やサービスの購入で成り立っていることに着目させるために、今朝の起床から登校までの行動を想起、記述させる。
	どこでどのように購入しているか	・ 店舗販売・無店舗販売について知る。 ・ 支払い方法の種類を知り、分類する。	・ 自身や家族の生活で購入した物資やサービスについて販売方法、支払い方法を分類させる。
	クレジットカードの仕組み	・ 後払いであるクレジットカードの仕組みを理解する。	・ クレジットカードが三者間契約を基に成り立っていることを説明する。
2 時間目	自分の生活のために必要な物資やサービス	・ 1日の行動とそこにかかる物資やサービスを書き出す。 ・ 1か月に必要な物資やサービスについて考える。	・ 目に見えないお金の流れがあることに気づかせるため、生活時間や長期的な時間経過に沿って、必要な物資やサービスについて考えさせる。
	物資やサービスの購入の分類	・ 生活に必要な物資やサービスの購入を分類する基準について考える。 ・ 必需的なものや選択的なものがあることが分かる。	・ 生活に必要な物資やサービスには、ライフラインに係る必需的なものや選択的なものがあることに気づかせるために、物資やサービスを分類する基準について考えさせる。
3 時間目	1か月の支出を考えよう	・ 自分や模擬家族の1か月の収支を見て、優先順位を考慮した金銭の管理計画を立てる。	・ 計画的な管理を行う必要性に気づかせるため、自分や模擬家族の1か月の収支を計画する機会を設定する。

授業において、購入場面や計画的な金銭管理について取り上げる際には、生徒自身の実際の生活と関連させて学習することが大切です。ただし、生徒の家庭環境も考え、プライバシーに十分配慮する必要があります。生徒の実態から配慮が必要な場合は、架空の中学生をモデルとし、その中学生の生活を提示して考えさせるとよいでしょう。家族の収入と支出の概要を考えるような活動をするときには、架空の模擬家族を設定して、具体的に考えられるようにしましょう。

クレジットカードの仕組み（三者間契約）については、立て替え払いの後払いであること、社会の信用で成り立っていることなどが理解でき、利点や注意点について考えられるようにしましょう。



実際に自分の生活を振り返って、その生活行動に必要な物資やサービスについて具体的に考えさせることで、ライフラインなどの見えにくい支出にも着目させましょう。

[illegible]

中学生にとっては難しく感じられる内容かもしれませんが、身近な生活と常に結びつけて考えさせ、学ぶ意欲を高めていくことが大切です。



8

高齢者との関わり方

介護の基礎ってどんな内容でしょうか？

◆学習指導要領「A 家族・家庭生活」より

(3) 家族・家庭や地域との関わり

ア(イ) 家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、高齢者など地域の人々と協働する必要があることや介護など高齢者との関わり方について理解すること。

イ 家族関係をよりよくする方法及び高齢者など地域の人々と関わり、協働する方法について考え、工夫すること。

(内容の取扱いより)

(3) のアの(イ)については、高齢者の身体の特徴についても触れること。また、高齢者の介護の基礎に関する体験的な活動ができるよう留意すること。イについては、地域の活動や行事などを取り上げたり、他教科等における学習との関連を図ったりするよう配慮すること。

◆学習指導要領解説より

- ・中学生の自分は支えられるだけではなく、家族や地域の一員として支える側になることができることが分かり、地域での決まりを守ったり、仕事を分担したりするなど、進んで協働することが必要であることを理解できるようにする。
- ・介護など高齢者との関わり方については、視力や聴力、筋力の低下など中学生とは異なる高齢者の身体の特徴が分かり、それらを踏まえて関わる必要があることを理解できるようにする。また、介護については、家庭や地域で高齢者と関わり協働するために必要な学習内容として、立ち上がりや歩行などの介助の方法について扱い、理解できるようにする。
- ・指導に当たっては、地域の行事や活動などを取り上げ、家庭生活と地域との関わりについて振り返ることができるよう配慮する。例えば、高齢者など地域の人々にインタビューして家庭生活と地域との関わりについて調べたり、自分が地域の人々とともにできることについて話し合ったりするなどの活動が考えられる。
- ・高齢者との関わり方については、介護の基礎に関する体験的な活動を通して、実感を伴って理解できるように配慮する。

◇押さえてたいポイント

これまで高等学校の学習内容であった、「高齢者」に関する内容が新設されました。これは、少子高齢社会に対応するためでもあります。ただし、中学校における高齢者は、協力・協働（一緒に活動）できる方が対象です。そのため、これまでであった地域との関わり方を考える学習と合わせて学習すると取り入れやすいでしょう。また、元気な高齢者でも、一般的には加齢によって視力や聴力、筋力などは中学生のそれとは異なります。それらを踏まえ、地域で協働するために必要な介護や介助について学んでいきます。しかし、食事や着脱衣など生活を支えるような介護については基本的には扱いません。高等学校家庭科における高齢者の介護に関する学習につながるように意識しましょう。



介護の基礎に関する体験的な活動は、どのように取り組んだらよいのでしょうか？



介助のこつを見つけよう

- ① 2人1組になり、筋力が低下している高齢者とその介助者を想定し、座っている人を、もう1人が介助して立ち上げよう。
- ② 今度は自分でゆっくりと立ち上がり、ふだん自分が立ち上がる際にとっている姿勢や動きを、お互いに観察しよう（足の位置、頭の動き、重心の移動など）。
- ③ 2の観察結果から、より少ない力で立ち上がりの介助をするにはどうすればよいかを考え、もう一度やってみよう。
- 【立ち上がりの介助方法】
- 1 足を床に付け、かかとが浮かないよう足を引き、手を離してもらう。
- 2 おじぎをするように手を斜め下に引き、お尻を浮かせてもらおう。
- 3 肩を伸ばし上体を起こしてもらい、力任せに引っ張り上げてはいけない。

▲高等学校家庭総合教科書 p.82～83

例えば、高齢者の身体の特徴を確認してから、生徒がペアを組み、立ち上がりや歩行など介助を体験するとよいでしょう。また、介助する側とされる側の気持ちや配慮を話し合うとよいでしょう。



◇授業での扱い方（2 時間扱い）

○題材名「地域と自分がどのように関わるか考えよう」

○題材の目標

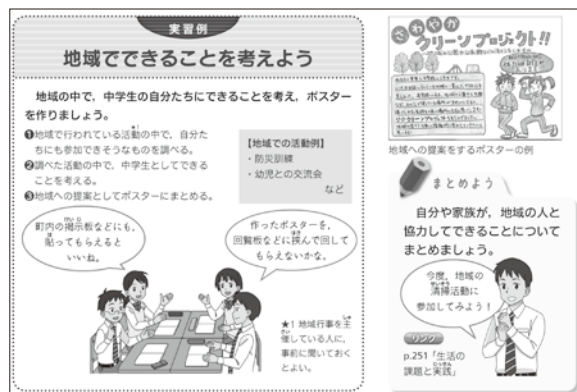
- ・ 家庭や地域の一員として支える側になっていくことが分かり、進んで協働する意欲を持つことができる。
- ・ 高齢者の身体の特徴を理解する。
- ・ 高齢者との関わり方が分かり、工夫できる。

学習項目	学習活動・内容	指導上の留意点
1 時間目	<p>地域との関わりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の人々とどのような関わりを持っているか考える。 ・ 家庭や地域の一員として支える側になっていくことを確認する。 <p>高齢者の身体的特徴の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単にできる高齢者の疑似体験をする。 ・ 加齢による体の変化について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭だけでなく地域の人々にも支えられて成長してきたことに気づかせる。 ・ 地域の方からのメッセージなどを伝える。 ・ 地域のためにできることはないか考えさせる。 ・ 高齢者の身体は中学生とは異なることに気づかせる。
2 時間目	<p>介護に関する体験的な活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ペアになり、立ち上がりや歩行などの介助の体験をし、介助をする側とされる側の気持ちを出し合う。 <p>地域に向けての発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家族や地域の人々、高齢者とどのように協働していったらよいか考え、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の身体的特徴や介護される側の気持ちに配慮しながら体験するよう伝える。 ・ ロールプレイを取り入れてもよい。 ・ 地域のために自分が具体的に何ができるかを考えさせる。

◇指導のヒント①

高齢者などの地域の人々との協働について

中学生が、家族や地域の一員として協働していくことの必要性を理解できるようにしましょう。地域との関わりの中には、幼児や高齢者も含まれるので、幼児の学習に加えて、高齢者との関わり方を考える視点も入れ、地域の学習が深められるようにしましょう。



▲教科書 p.181 「地域でできることを考えよう」



誰も、今まで一人で生きてきたわけではなく、家族や地域社会、周囲の誰かに支えられて生きてきました。中学生も家族や幼児、地域のために何かしたいという意欲を持っています。地域に頼られる中学生としてどのような活動ができるかを考えてみましょう。少子高齢社会に対応し、高齢者との関わり方を理解し行動することで、地域で喜ばれ役に立つ存在になりたいという意欲を育み、地域とのつながりを深め支える立場としての自覚を持つことができるでしょう。

◇指導のヒント② ゲストティーチャーの活用

高齢者の介護に関する専門家などを招待して、高齢者との関わり方、介助の仕方について話を聞くことなども考えられます。自治体の福祉課や、デイケアサービスの方などにお問い合わせをすると、協力を得られることも多いでしょう。

■資料■ 簡単にできる高齢者の疑似体験

- ・ 耳栓をする→聞こえにくい
- ・ 黄色いクリアファイルやセロハンを通して周囲を見る→白内障などの症状で見えにくい
- ・ 軍手を二重にはめる→指先の感覚が鈍い
- ・ 足に左右重さの違う重りをつける→歩きにくい

年 組 番 名前	
高齢者との関わり方を考えよう	
1 これまで地域の人とどのような場面で関わってきたか、思い出しよう。	
どのような場面で	どのように
2 高齢者の身体的特徴について、中学生との違いをまとめよう。	
体の部位	中学生との違い
肩	
目	
手首	
足	
3 ペアになって介助体験を行い、分かったことや感想をまとめよう。	
介助する側	介助される側
立ち上がり体験	
歩行体験	
4 これから高齢者と協働していくにあたり、どのようなことができるか考えよう。	

ワークシート例▶



生活の課題と実践

今までの内容とどう違うのでしょうか？

◆学習指導要領「A(4) ア, B(7) ア, C(3) ア」より

家族・家庭生活／衣食住の生活／消費生活・環境についての課題と実践

ア 生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けてよりよい生活を考え、計画を立てて実践できること。

(指導計画の作成より)

(2) 家庭分野の内容の「A家族・家庭生活」の(4)、「B衣食住の生活」の(7)及び「C消費生活・環境」の(3)については、これら三項目のうち、一以上を選択し履修させること。その際、他の内容と関連を図り、実践的な活動を家庭や地域などで行うことができるよう配慮すること。

◆学習指導要領解説より

- ・習得した知識及び技能などを実生活で活用するために、「生活と課題の実践」については、A、B、Cの各内容に位置付け、他の内容と関連を図り、実践的な活動を家庭や地域などで行うなど、内容の改善を図っている。
- ・(A～Cの内容で関連を図り、)生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、計画を立てて実践した結果を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどの学習を通して、課題を解決する力と生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養うことをねらいとしている。
- ・生徒の興味・関心等に応じて、A～Cの他の内容と関連させて課題を設定できるようにする。

◇押さえないポイント

これまでの家族・幼児、衣食住の生活に加えて、消費生活・環境の内容にも新設されたことが大きなポイントです。より総合的に生活をよりよくできるよう、年間指導計画の中で効果的に取り入れましょう。

生活の営みに関する見方・考え方を働かせ、生徒が目的を持って取り組む学習場面の設定と学習活動の工夫をしましょう。自らの生活を振り返り、生活の営みに関する見方・考え方を働かせ、これからの家族・家庭の機能を意識する学習課題を工夫させます。家族・家庭、衣食住、消費・環境などに関する実践的・体験的な活動を通し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する力を育む問題解決的な学習活動にすることが大切です。そして、学習課題を意識して説明したり、表現したり、話し合う学習活動を取り入れるようにしましょう。

生徒が主体的によりよい解決方法や新たな課題を見出すことができるよう振り返りを工夫しましょう。計画作成などや実践後の発表の場面で他者と関わる学習活動を通し、考えを再構築する授業展開の工夫が求められます。更に、一連の学習活動を振り返り、新たな課題を見つけて取り組めるような振り返り活動にしましょう。



現行指導要領で「3学年間で1又は2事項を選択」となっていたところが、「3学年間で1以上を選択」となりました。どのような違いがあるのでしょうか。

年間指導計画等に応じて自由に設定できるよう選択の幅が広がりました。また、生徒の興味・関心などに応じて、AとC、BとCなど、内容を関連させて複合的に扱うことができるようになりました。1回の実践で2つの内容を選択できるため、「3学年間で1以上を選択」という示され方になったのです。



○A～Cの内容で関連を持たせた例

- ・幼児のためのおやつ作り (A 幼児と B 食生活)
- ・幼児の遊び道具の製作 (A 幼児と B 布製作)
- ・環境に配慮した調理 (B 食生活と C 消費・環境)
- ・家族共用の家電製品の購入 (A 家族と C 消費・環境)

◇授業での扱い方（4 時間扱い）

○題材名「魚の調理・野菜の調理を工夫しよう」

○題材の目標

- ・食生活についての課題を見つけ、その課題を解決するための 1 食分の調理について計画を立てることができる。
- ・課題を解決するための実践を計画に沿って行い、実践したことをまとめて発表することができる。

○授業の流れ

学習項目	学習活動・内容	指導上の留意点
1 ～ 2 時間目	計画	<ul style="list-style-type: none"> ・魚、野菜の調理上の性質を理解し、特性を生かした調理計画を立てさせる。 ・既習した中学生の一日に必要な栄養を満たす食事の献立についての知識を基に、日常の 1 食分の調理について、食品の選択や調理の仕方、調理計画を考え、工夫させる。 ・自分で課題を設定させ、調理計画を具体的に考え、実践計画を作成させる。
(家庭での実践)	<ul style="list-style-type: none"> ・調理計画を基に、1 食分の調理の実践を行い、結果をワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に作成した食品の選択や調理に必要な手順、時間などの調理計画を基に、調理を行い、調理後の後始末の仕方や実習後の評価も含めて学習ができるよう実践させる。
3 ～ 4 時間目	発表・まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の成果について報告をし、他者評価を行い、更に食生活をよりよくするための意欲を持つ。 ・実践の成果について発表を行い、計画通りにできたか、課題解決ができたかどうか、新たに出た課題は何かなど、今後の食生活をよりよくするための意欲を持たせる。

◇指導のヒント 生活の課題と実践の進め方

問題を解決する道筋を意識して、生活の課題と実践に取り組みましょう。上の例では、「B 衣食住の生活」(2) 中学生に必要な栄養を満たす食事と (3) 日常食の調理と地域の食文化とを関連させ、前時までに学習した知識を活用し、改善・工夫点を考えて家庭内で実践する流れで、問題解決を目指します。魚と野菜の特徴や調理上の性質、栄養を生かして行った調理実習の反省を基に、自身の 1 食分の調理を家庭で行わせ、食生活への更なる興味・関心の向上を目指します。自分の調理計画について、グループ内で相互に意見を共有し合い、自己の考えを再構築させ、最終的な実践計画を基に実践できるようにします。実践後の発表会では、評価・改善を通し、新たな食生活の課題を見つけ、取り組むことができるよう振り返りの活動を工夫しましょう。



▲教科書 p.252-253 図 1「生活の課題と実践の進め方」

実践の中で見つかった課題の中から、消費生活・環境に配慮した調理について考えるように促すなど、新たな課題を次の学習の導入として扱い、発展させていくこともできます。



ワークシート例▶

年 組 番 名前

生活の課題と実践に取り組もう

1 課題を設定しましょう。

●この課題は――

2 実践計画を立てましょう。まずは左の実践計画を立てましょう。

実践計画	計画の経過

3 友達の実践計画を見て、感想やコメントをしましょう。また、もらった感想やコメントを基として、2の計画の経過し、改善することがあれば書いておきましょう。

もらったみんなの感想を記入しよう。

MEMO

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

◆デザイン・組版：長野佐稚子

◆イラスト：カッピー 18, 白井郁美

◆撮影：ピースローブ